第九編　文化財

第一章　花尾神社

花尾山の南麓に鎮座するこの神社は、絢爛豪華な建築で知られ、その美しさを日光東照宮にたとえて「薩摩日光」とも称される。

創建は建保六年（一二一八）と伝えられ、古くは「厚智山権現」「花尾権現」とも呼ばれた。祭神に清和天皇、主神に源頼朝と丹後局、従祀神として僧永金を祀る。

第一節　「薩摩日光」花尾神社

1　由緒

「花尾大権現廟記」には、神社の由緒について次のように書かれている。

島津氏初代の忠久（一一七九～一二二七）は、正治元年（一一九九）に亡くなった父源頼朝のために、建保六年（一二一八）花尾山の麓に廟堂を建ててその尊像を安置した。

忠久の母丹後局は、初め頼朝の寵愛をうけ、その子を身ごもったが、頼朝の正妻である北条政子に疎んじられて西国へ逃れ、摂津（大阪）の住吉大社境内で忠久を出産した。その後、局は忠久を連れて惟宗広言に再嫁した。成人した忠久は薩摩・大隅・日向の守護職に任ぜられ、文治二年（一一八六）に薩摩の国に下向し、養父広言を市来院の地頭職に任じて、母丹後局とともに市来に住まわせた。またこの時、郡山の厚智村・東俣村（当時満家院の内）が丹後局の采地と定められたので、局は時々この両村を訪れることもあった（神社近くには、花尾を訪れた丹後局が憩ったという言い伝えの「腰掛石」が残る）。

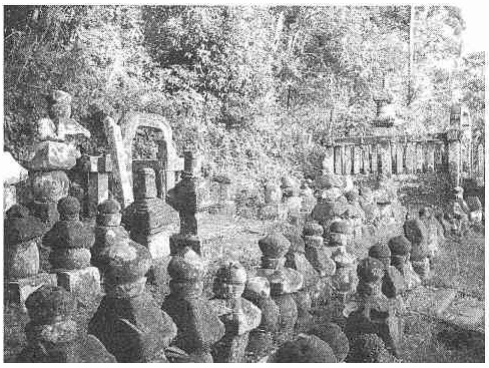
このような縁から、安貞元年（一二二七）に丹後局が亡くなると、その亡骸は遺命により花尾山の麓で荼毘に付された（荼毘所の跡が神社入口左手の谷に、墓所が右手の丘にある）。

また、花尾に平等王院という寺院を開山した永金阿闍梨という僧は、丹後局が帰依したという徳の高い僧侶だった。

そこで、丹後局・永金の二人の像を、さきの頼朝像の両脇に安置し、三霊を合祀して、花尾権現として祀ることとなった。

丹後局御腰掛石

『三国名勝図会』によれば、腰掛石は社殿より六町（約六五〇メートル）ほど離れた参道沿いにあり、斎垣が廻らしてあった。



丹後局の墓と石塔群

花尾神社参道入口、向かって右手の丘には、数十基に及ぶ古石塔が建ち並んでいる。ここは、遺命により花尾山の麓で荼毘に付された丹後局の遺灰を集めて「灰塚」とし、石塔を建てて遺骨を納めた場所であり、周囲には局の側近く仕えた人々が葬られたという（「花尾大権現廟記」）。

石塔の多くは年代が刻まれていないか、表面が風化して刻字の判読が困難なものが多く伝説の真偽のほどは定かではないが、なかには一四世紀に造られた石塔もあり、貴重なものである。

このように、花尾神社は島津家との結びつきが深く、その祖廟として崇敬を集め、繁栄してきた。とりわけ江戸時代には藩の庇護のもと、壮麗な社殿が造営され、境内も整備されて、しばしば藩主を初めとする貴人の参詣を迎えてきた。

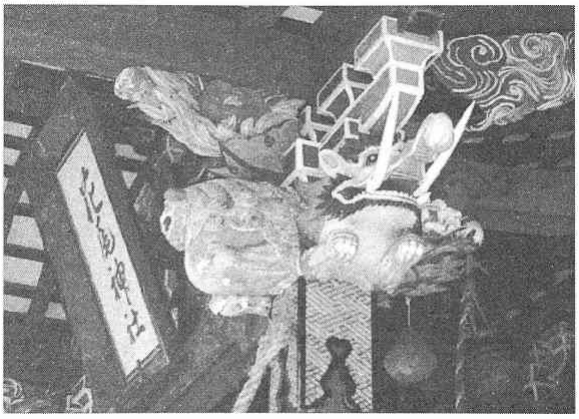
2　神社とその周辺

社殿

四九二六坪の広大な境内の奥、一段高くなった場所に、遠目にも鮮やかな朱塗りの社殿が建つ。

入母屋造りの大きな屋根の正面には千鳥破風が付けられ、向拝（社殿正面階段の上、参拝の人が立つ場所）には唐破風が用いられ、格式の高さを感じさせる造りである。

向拝の庇の下に立ち、上を見上げてみると、動植物をかたどった彫刻や極彩色の装飾の数々におもわず目を見張る。左右向拝柱につけられた貘や獅子の彫刻（この部分を「貘鼻」「獅子鼻」ともいう。向かって右の柱につけられた彫刻は阿形で口を開き、左は吽形で口を閉じている）や、虹梁（向拝の表の柱と奥の柱をつなぐ梁）、正面中央の蟇股に施された装飾などが一体となって、華やかな拝礼の場所を形作っている。



貘鼻・獅子鼻（阿形）

社殿は奥から本殿・祝詞殿・幣殿・拝殿から成り、日光東照宮などに見られる権現造によく似た構造をしている。

本殿内殿には三棟の宮殿を安置し、御神体である神像や神社創建からの歴史を物語る神鏡などの神宝類が多数納められる。拝殿および幣殿は木連れ格子の蔀戸で囲われており、複雑な出組が格天井を支えている。社殿内部の装飾でひときわ目を引

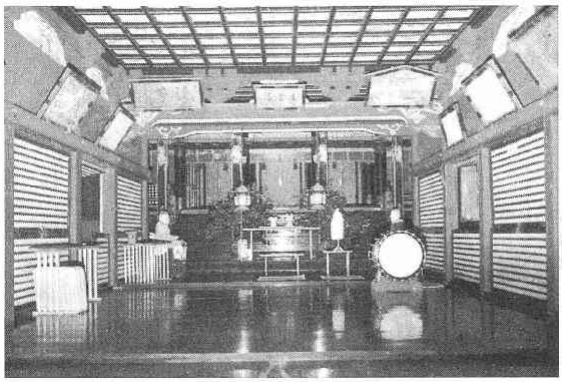
くのは各柱間、出組と出組の間に入れられた蟇股の装飾である。鶴や牡丹などそれぞれに意匠を凝らした彩色や彫刻が、美しい曲線を描く蟇股のひとつひとつに施されている。

なお、拝殿・幣殿の格天井の各格には四〇一枚もの草花の絵が描かれ、色あせてはいるが可憐な姿を留めている（植物については第六節で詳述）。壁面には琉球から贈られた扁額をはじめとする奉納額が多数掛けられ、花尾神社への崇拝の歴史とその広がりを感じさせる（琉球扁額については第四節4に詳述）。（これら社殿の造営、修復の経緯については、第二節4、第三節1に述べる。）

名工　阿蘇鉄也

幕末の名君斉彬の時代の嘉永五年（一八五二）、花尾権現の社殿（宝殿・舞殿・拝殿および鐘楼）は大修理が行われている。

この時の棟札に「大工頭」として名前が記されている阿蘇鉄也は、天保年間に肥後の名匠岩永三五郎のもとで鹿児島城下の五石橋建設に関わったことで知られる当代きっての名工である。



社殿内部

阿蘇鉄也（一八〇一～一八八六）は、川内平佐の北郷家家臣の家に生まれた。通称矢次右衛門。天保六年（一八三五）三五歳の時に藩の御用大工となり、まもなく大工頭に取り立てられ、天保一一年（一八四〇）肥後から岩永三五郎が招聘されると、彼を補佐して石橋の建設をはじめとする藩の土木事業に従事した。

その後、安政元年（一八五四）の大地震の後には江戸高輪藩邸を修復し、その腕を買われて翌二年には炎上した京都御所の再建にもたずさわっている。他にも大口の忠元神社（弘化元年（一八四四））、指宿神社（弘化四年）、川内の新田神社（嘉永二年（一八四九））などを造営、晩年には川内川の初代太平橋（明治八年（一八七五）完成）の架橋も手がけている。

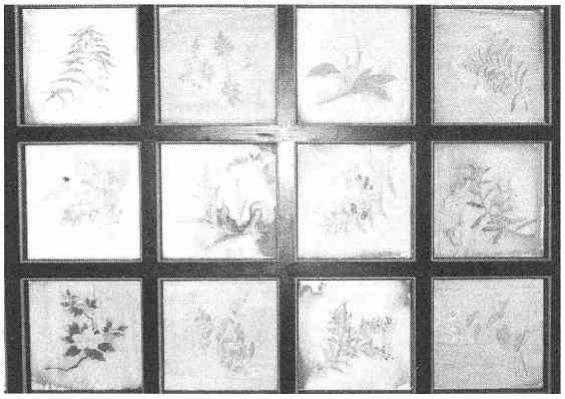
社殿内の天井絵―絵師　能勢一清

大修理の行われた嘉永五年（一八五二）の棟札には書かれていないが、拝殿・幣殿・祝詞殿の天井に四〇一枚もの美しい草花の絵が描かれたのも、この修理の時だったと考えられる。

『画人伝備考』（井上良吉）によれば、この天井画を描いたのは能勢一清という幕末の薩摩藩の絵師で、「嘉永六年春（一八五三）、花尾神社改築の際、同社殿内格天井に花卉を描けり」という記録がある。

能勢一清（一七九〇～一八五七）は、名は康応、通称武右衛門、小字は十郎次といい、曾祖父はやはり絵師の能勢探龍（木村探元の弟子）で、画家内山一観（一八二三～一八九七）の実父でもある。雅号は浄川軒一清、烹庵、静得、懐徳庵、黙観、心斎などがある。幼いころ画を城下西田の森某という人の門に学び、一五歳からは独

学で絵を描き続け、もっぱら狩野探幽・木村探元らの絵を手本にしてその画法を追求し、ひたすら模写を続けた。花尾神社の天井画の他にも伊集院広済寺（廃寺）に十六羅漢図を描くなどの事績が伝えられ、「楼閣山水図」（鹿児島市立美術館蔵）「富士図」「寿老人龍虎図」（鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵）などの作品がある。



格天井に描かれた草花

参道の風景

境内へ至る道筋には杉並木が整えられ、立ち並ぶ巨木は古来多くの参拝者がこの参道を往来した歴史を物語る。かつては一から三の鳥居まであったようだが、現在は南方小跡地付近にあったという一の鳥居はない。神社周辺からは鎌倉末期にまで遡る古い石塔が多数見つかっており、参道沿いに保存整備されている。御産の神様として有名な丹後局の墓などゆかりの旧跡も数多い。

「薩藩勝景百図」（文化一二年（一八一四）製作）（口絵）に描かれているのは、約二百年前の花尾の姿である。

「花尾」という名にふさわしく、色とりどりの花が参拝者を迎え、峰々が重なるその奥にはひときわ高くそびえ立つ花尾山がみえる。

鳥居と社殿の間には仁王門があり、社司の横、ちょうど現在社務所がある辺りには別当寺である平等王院などの寺院が建ち並び、境内には鐘楼や毘沙門堂などもあった。

神仏混淆（こんこう）だった「花尾権現」は、明治に入って、神様だけを祀る「花尾神社」に変わるとともに、寺院や仏像など仏を象徴する物はすべて失われてしまったが、この絵図からは神仏分離によって神道一遍となる以前の花尾の姿を垣間見ることができ、興味深い。

3　花尾詣

鹿児島の城下から郡山の花尾神社までの道はかつては花尾街道とも呼ばれ、参拝者が絶えなかったといわれる。

「薩陽往返記事」などの紀行文で知られる高木善助（〜一八五四）が残した「紀行篇画帖」という紀行画集には、花尾神社について「花尾山大権現ハ城下ヨリ北三里余ニアリ、薩摩国守君ノ御先祖島津忠久公ヲ摂州住吉ニテ産タマフ母君丹後局ヲ祭レルヲヨシニテ、今ニ城下ノ士庶安産ヲ祈願ナリ」と記されており、花尾神社が安産の神様としてたいへんよく知られていたことを伝えている。

花尾神社入口右手の一段高くなったところにある墓塔群の中に、丹後局の墓といわれる多宝塔があり、塔下部の方形の石の中に遺骨が納められていると伝えられる。

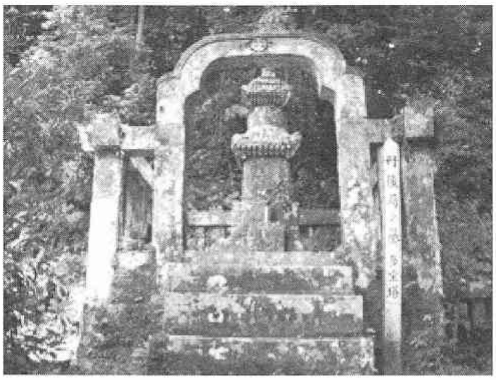
丹後局の墓の傍らには、「御苔石」とよばれる小さな石塔があるが、この石塔についた「御苔」をもらうと安産になるとの言い伝え

があり、お守りとして持ち帰る人が後を絶たない。

普段は神域として深い静寂に包まれる境内も、祭礼の日にはあちこちから人が集まり、大いに賑わいを見せる。

花尾権現の祭礼の様子は『三国名勝図会』にも「毎年八月十二日（旧暦）、厚地の農夫当社の前庭に於て金鼓を奏して舞踊を興行す、其の次に婦女の舞踊あり、諸方より聚観して甚閑然（にぎやか）なり」と紹介されている。戦前は、花尾神社の秋の例祭は通夜祭と呼ばれ、祭礼の日には日用雑貨から反物までを扱う市が参道沿いに立ち並び、徒歩や臨時バスで鹿児島市内のほか各地から訪れる多くの参拝客で賑わったという。

今でもこの通夜祭ほどの賑わいではないが、九月二三日の秋の大祭には、花尾神社の境内では太鼓踊りや獅子舞、疱瘡踊りなどの芸能が奉納され、それらを見に来る人々で参道から境内までが華やいだ雰囲気となり、郷土の伝統芸能を伝える場としても大切に受け継がれている（第一〇編民俗芸能参照）。なお、近年は鹿児島からの時代行列「蟻の花尾詣」も到着し、賑わいに花を添えている。



丹後局の墓（多宝塔）

御苔石

大平の獅子舞

蟻の花尾詣

4　誌された花尾神社

江戸時代には「花尾権現註縁起」「花尾大権現廟記」「花尾社伝記」などの社伝記が作られているが、いずれも薩摩藩を代表する碩学（せきがく）が筆を執っている。

「花尾権現註縁起」と覚慧法印

「花尾権現註縁起」は元禄二年（一六八九）、当時の大乗院一七世住持華海覚慧法印の作。覚慧（一六四二～一七一三）は若くして各地に遊学して密教の行を修め、博学でも知られる名僧で、藩主吉貴の崇敬も厚く、晩年は大乗院末寺の潮音院に隠居した。仏教的世界観に基づきながら、地元の伝説なども盛り込んで当時の花尾の姿をいきいきと描写した闊達な文章の縁起である。（「日置郡地誌備考追録」収載）

「花尾大権現廟記」と山本正誼

「花尾大権現廟記」は、『三国名勝図会』に全文が引用されており、社伝記の中では最もよく知られている。花尾山に「大権現」の神号が与えられた寛政元年（一七八九）に作られた。作者の山本正誼（一七三四～一八〇八）は藩校造士館の初代教授で、「島津国史」（享和二年（一八〇二））などを著した。

「花尾社伝記」と伊地知季安

「花尾社伝記」は、寺社や記録所などに残された厖大な史料から花尾社に関する記事を拾い上げ、編年で網羅した社史の形を取っている。著者の伊地知季安（一七八二～一八六七）は、「雲遊雑記伝」「漢学起源」「南聘紀考」「寛永軍徴」「管窺愚考」など数々の著作で知られる（薩摩藩の正史「旧記雑録」はその子季通が父季安の遺志を継ぎ完成させた）。晩年季安は島津家の家譜編纂に精力を注ぎ、島津忠久の出自について高倉宮以仁王（もちひとおう）の遺児という独自の説を唱えており、この「花尾社伝記」および「花尾祭神輯（しゅう）考」などの著作にもその史観が強く反映されている（平等王院の開山僧永金を、以仁王が平氏追討の挙兵に失敗した後、その遺児を匿（かくま）った罪で薩摩に流された比叡山の僧永雲の変名であるとするなど、随所に独自の解釈に基づいて書かれた記述が見られる）。

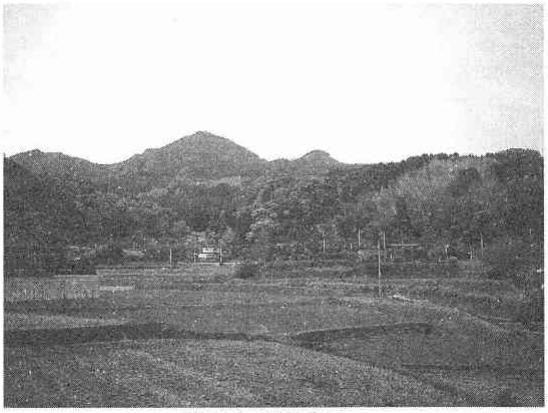
第二節　花尾山と信仰

1　「花尾」の由来

花尾山は標高五四〇メートル、東側は切り立った崖をなし、登るのも困難だが、南西側は比較的傾斜も緩やかである。甲突川の支流川田川の源流でもあり、ここからの眺望はすばらしく、桜島・鹿児島市街はもとより、遠く金峰山・吹上浜・野間岳なども望める。

「花尾権現註縁起」は、花尾山の名の由来について次のように記している。

花尾嶽は薩州満家院厚智邑の高山の名なり、此の山の絶頂に本（も）と熊野権現鎮座し玉ふが故に、修練の者春の



花尾山（中央）

祭りに野躑躅（つつじ）・山躑躅などの千種（ちぐさ）の花を折り供しけり、元より絶頂南北の峯に花多く、山上山下にも花多ければ花尾の名を呼ぶなり

花尾嶽の頂には古くから熊野権現が祀られていて、春の祭りには修行者が野躑躅や山躑躅など、そこここに咲く種々の花を手折って供えたという。この山は山上山下に野の花が咲き乱れ、そこから「花尾」という名で呼ばれるようになったのだという。

伝説では花尾山に熊野権現が勧請された時、その本地である弥陀・薬師・観音の三尊がこの地に影向（ようこう）する（姿を現す）という霊験（れいげん）があったという。『三国名勝図会』によれば、その場所は社殿の西、祓川（現　宮脇川）を隔てて一町ばかり、園田門という所にあった。その岩は地元では「影現の岩」・「御本地の岩」・「御正体の岩」などと呼ばれ、三尊の種子（仏菩薩などの諸尊を標示する梵字）が彫りつけられ、注連縄（しめなわ）が張られていた。

江戸時代には山上の熊野権現と麓の花尾権現とは別々の神を祀っているが、古くは山全体を一つの神として信仰していたようである。

熊野は紀伊半島の南にある霊地で、熊野権現は熊野三所権現・熊野三山ともよばれ、本宮大社・速玉大社（新宮）・那智大社の三神を総称していう。熊野信仰では本地垂迹説（ほんちすいじゃく）により神と仏を同体と考え、本宮・速玉・那智の三神に対応する仏としてそれぞれ阿弥陀如来・薬師如来・千手観音を本地と定めて祀っている。平安時代末から鎌倉時代にかけてのいわゆる院政期には、末法思想の広がりを背景に、上皇・法皇や貴族たちの熊野参拝が盛んに行われるようになった。京都から熊野へは往復約六三〇キロメートルもの行程を歩いて辿り、しかも険しい山道を越えなければならないという大変な苦行であったが、参詣の途中には沿道の王子社（熊野権現の分霊を祀る九十九王子社）で神楽を奏し、和歌を詠むなどの宴に興じることもあった。その後、熊野信仰は、御師や先達、熊野比丘尼らの積極的な布教活動によって、武士や庶民、そして全国各地へと広がりをみせ、室町時代には「蟻の熊野詣」と称されるほど盛行した。

2　厚智山権現の創建

創建者大蔵氏と永金

花尾山およびその麓一帯は、古来より厚智（厚地）という名で呼ばれてきた（「花尾山、或は厚智山と名く、村を厚智と云ふ、故に山にもその名あり、又俗には厚地と書けり」（「花尾権現註縁起」））。

花尾神社もはじめは厚智山権現の名で呼ばれていたようである。神社には創建の年とされる建保六年（一二一八）に献納された鏡が伝えられるという。なお、この銘文に記された「厚智」という文字がこの地名の初見といわれている。

（1）十一面観音　径八寸八分　仏長五寸八分　座一寸

薩州満家院厚智山権現御正体七体内
右志者、為聖朝外朝日本大将軍家御願成就、
殊者、為当国守護所惟宗忠久并小野氏悉地成就、
且為当国惣地頭当院地頭寿命長息、且為法界
衆生同利益、如右、
建保六年大歳戊寅　九月日　「大勧進増」永金敬白

（2）阿弥陀　径一尺五分　仏長七寸三分　座一寸二分

薩州満家院厚智山権現御正体七体内
右志者、為聖朝外朝日本大将軍源朝臣御願成就、為両家奉省預所当国守護所惟宗忠久悉地成就、且為当院弁済使地頭寿命長息如件、
建保六年大歳戊寅九月日　大蔵臣（大勧進僧の誤り）僧永金
大中臣　眞久

（3）阿弥陀　径七寸九分　仏長六寸三分　座一寸二分

薩州満家院厚智山御正体七体内
右志者、為正朝外朝御願成就、別為当御荘領家預所御願円満、且為当院弁済使寿命長息、造之如件、
建保六年九月日　「勧進僧」永金

（4）（釈迦か）　径八寸　仏長五寸九分　座一寸三分

薩州満家院厚智山御正体七体内
右志者、為正朝外朝御願成就、別為当御荘領家預所御願円満、
（左傍銘文に脱漏あり「且当院司大蔵幸満并紀氏、為大蔵宗頼并宗形氏息災延命、且為法界衆生平等利益、造之如右、」）
建保六年九月日　永金

（5）千手観音
（仏像図写なし）
（左傍）薩州満家院厚智山権現御正体七体内
右志者、為当院大蔵幸満并紀氏、大蔵宗頼并宗形氏、
（右傍）建保六年大歳戊寅九月日　大勧進僧栄金
大中臣　眞久

図像（1）～（4）は、江戸時代の明暦年間に花尾権現の御神体である神像や正体鏡が藩命によりあらためられた際に作成された鏡面の模写図で、「島津氏世録正統系図」より転載した。

なお、（1）～（4）の銘文については、「島津世家」（郡山遜志著、宝暦一〇年（一七六〇）頃）および「秘伝島津譜図」（伊地知季安著、安政四年（一八五七））の記述により補訂を加えた。

（5）の鏡は「島津氏世録正統系図」には記載がないが、「島津世家」・「秘伝島津譜図」には（1）～（4）と同じく「御正体七体内」の銘文を持つ鏡として紹介されている。

これら五面の鏡にはいずれにも「薩州満家院厚智山権現御正体七体内」と刻まれており、権現の「御正体」（御神体である鏡に神仏習合による本地仏の姿などを刻んだもの）として、もともとは七面一揃いで奉納され、礼拝されてきたもののようである。

銘文には、朝廷や鎌倉幕府、守護惟宗（島津）忠久や、地頭・領家・預所（あずかりどころ）・弁済使（べんざいし）、そして祈願（あまね）の主体者である当院（満家院）の院司大蔵氏一族の名が掲げられ、遍く安泰がもたらされるよう祈念されている。

勧進僧（かんじん）（勧進とは広く人々に善根功徳を勧め、寺社の建立などの

ために浄財を募ること）としてその名が見え、厚智山権現の創建に関わったと考えられる永金の出自については詳しくはわからないが、社伝には俗姓大蔵氏を名乗りこの地の領主であったこと、その徳を慕い丹後局が帰依したこと、権現の別当寺である平等王院を開山したこと、花尾廟には頼朝・丹後局とともに永金の像が安置され、祭神の一人として祀られていることなどが伝えられる（「花尾大権現廟記」）。

当時の厚地は満家院の内に含まれており、（4）（5）の銘文には当院院司として「大蔵幸満」の名が見える。大蔵氏が満家院の院（郡）司職に就いた時期ははっきりとはわからないが、平安末期には在任したようである。建久八年（一一九七）の薩摩国図田帳によると、満家院一三〇町は島津荘の寄郡で、領家・国衙に両属し、地頭島津忠久と院司の大蔵業平（あるいは資宗とも）が支配している。幸満（あるいは幸光とも）はこの業平の子である。

その後、大蔵氏は承久の乱（承久三年（一二二一））で上皇方についたため没落し、代わって満家院郡司職には大蔵氏と縁戚関係にあった税所氏（祐満）が就き、厚智山座主を兼帯した（加治木氏系図・税所氏系図）。なお税所氏が厚智山座主職を兼帯していたことから、先代の院（郡）司である大蔵氏も同様に、没落以前は厚智山座主職にあったものと考えられる。

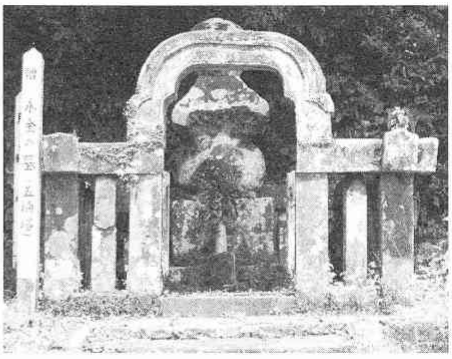
このように、平安末から鎌倉時代の初めにかけて、在地領主としてこの地を支配していた大蔵氏が厚智山権現の創建に深く関わっていたことは間違いないだろう。

◇永金墓と古石塔

花尾神社参道入口、向かって右手の丘には、僧永金の墓と伝えられる五輪塔がある。石段をつけ、斎垣を廻らし、丹後局の墓と伝えられる多宝塔と並んで昔から特に大切にされてきた。

この永金の墓には不思議な伝説がある。

江戸時代の初め、万治年中（一六五八～六一）のこと、円融院の僧盛誉がひどい頭痛を煩い、いろいろと手を尽くしたがいっこうに病状はよくならず、ある時永金の墓塔の後の大木が倒れて風輪空輪が壊れたままになっていたのを思い出し、改修して供養したところ、長い間悩まされていた頭痛がぴたりと治まったという。また同じ頃、東座主の百姓の女が頭に虫ぶくろというできものができ困っていたが、盛誉に教えられ、永金の塔に灯明を供えて祈ったところ、ほどなく平


永金墓五輪塔

月輪塔

宝篋印塔

癒したという。里人はこの不思議を信じて献灯の明かりを絶やさなかったという（「花尾権現註縁起」）。

永金の墓の右前には「永徳四年甲子卯月二十五日　当山座主大禅師影相逮善」という銘が刻まれた宝筐印塔が、奥隣には「元徳二年（一三二九）八月吉日　僧快善道修」の刻字のある月輪塔などがある。

別当寺平等王院

厚智山権現には別当寺として平等王院という寺が建立された。平等王院の開山は永金と伝えられる。この別当寺とは神仏習合の思想に基づき神社に附属して置かれた寺院をいう。

また、この一帯には平等王院の支院・塔頭（たっちゅう）がだんだんと建ち並び、盛時には三六坊を数え、「楼閣香火の盛なること当時たぐひもなかりし」（「花尾大権現廟記」）と伝えられるほど隆盛を極めたという。

この三六坊の名称は定かではないが、「花尾大権現廟記」には、「四坊（円融院・本地院・普賢院・多聞院）の外にも大乗院の旧記に、安上院・中道院・吉祥院・菩提院・花蔵院・宗智坊・堅義坊・神ノ坊・西ノ坊などいへる名見えたり、右の外にも厚地村の内に、慈光門・松下門・田中門・谷口門・東座主・西座主などいへる所は、むかしの三十六坊の跡なり」と伝えられる。

また、大乗院調べの「花尾山御宮其外取調帳」（文久三年（一八六三）一〇月、「日置郡地誌備考追録」収載）には年代不明ではあるが、これら三六坊の名称と旧地を記したものと思われる書付が残されている。これによれば厚地周辺の寺々は、平等王院を大座主とし、さらにその下に一〇の座主職が定められており、またここには東俣にある一之宮大明神の座主を勤める寺も記されており、花尾・一之宮両社の密接な関係を窺わせるものである。

（「　」は「花尾社伝記」により校訂）

「亥正月とあり候、年号不相見候」

平等王院　大座主

東座主	小之座主	
吉祥院	二之座主	古、薗田にあり
本地院	三之座主	
多聞院	四之座主	
普賢院	五之座主	
円融院	六之座主	
西座主	七之座主	
田中寺	八之座主	田中屋敷にあり
脇之院	九之座主	古、脇屋敷にあり
慈光院	十之座主	古は寺光門にあり
東光院	一之宮之座主大座主	
湯屋院	一之宮之座主小座主	
谷口坊		古、今の多聞院にあり
庄源寺		古は原口屋敷にあり
大平寺		大平屋敷にあり
小平寺		小平屋敷にあり
夏田寺		古、茄子田にあり
金輪寺		古は今の平等王院にあり
保田院		古、久保田にあり

岩戸寺　岩戸村にあり
久正院［久山寺カ］　古、六社之下にあり
永田寺　古、長田屋敷にあり
（他に以下の寺名が列挙されている）
松下坊　庵之坊　金生寺　光薗院　宝寿院　蜜厳寺
覚勝寺［覚勝院カ］　妙見院　柿本寺　安楽寺　砂田寺
大善寺［大善院カ］　幢元院　仏知院

3　霊峰花尾山と修験

花尾山は、その山自体が古くから信仰の対象とされ、山頂の熊野権現社をはじめ、山中には堂宇や祠などが設けられ、また容易に人の立入れない場所には修験者の行場なども存在した。

「花尾権現註縁起」はこの花尾山の山中の様子や山上の世界を次のように記している（現代文に読み下し）。

花尾嶽の頂上からはまさに「三千世界の海雲」を下に見る絶景が広がっている。ここには熊野権現が祀られ、その社は麓の花尾権現に対して「上宮」と呼ばれていた。麓から上宮へ至る道のりは三七町を数え、古くは参道が整えられ標識も立てられていた。

「八王子」といって、上宮までの間には石祠が立てられており、東俣の境の川側に一の王子という小さな石祠がある。この石祠は上宮近く吉田郷との境（吉田口）にも立ち連なっており、ここは丸山からの参道沿いにあたる。

上宮の社壇の前より北に下り二町余の所に、巽（たつみ）（南東）の方向に高く突き出た険しい岩場がある、高さはわからないが、長さは七～八尺（一尺＝約三〇・三センチメートル）の間（「花尾大権現廟記」には四～五丈とあり。一丈＝約三メートル）、広さは五～六尺ほどで高低もあり、乾（いぬい）（北西）の一面だけが山に接している。そこから慎重に足を運んで、はらばいになって下を臨むと、そこには「目眩、魂飛して、正く視、正く立つに堪」えないほどの絶景が広がっている。吉田・蒲生を足下に、大隅・日向は目前に、遠く霧島・桜島まで見渡せ、その美しさは画にも写しえないほどである。

この岩場は、昔修行者が護摩修法を行った石壇で、俗に「火焼の岩」とも言い伝えられる神聖な場所で、自分（覚慧）もここに来ると柴を焼き花を手折って黙祷を捧げるという。

社壇よりこの岩場までの尾つづきには、二尺三尺回りの三葉の躑躅（つつじ）が路をはさみ、見る人の目を驚かせている。

山中には、薬草薬樹も多く、里人はかつて円融院の僧が作ったという歌（徐福（じょふく）伝説）を聞かせてくれた。

厚地山頭熊野の祠　蓬莱薬草花を着て奇なり
昔時徐福解すること知る有り　此峯に留て紀伊に至ること無し

文中、「王子」とは本社の祭神に対し親子・眷属（けんぞく）関係にみたてた御子神（王子神）を祭った社のことで、熊野参詣の沿道にも九十九王子社が祭られている。往古は花尾「上宮」までの参道沿いにも八ヶ所の王子社が祭られていたものと思われる。

（王子社の写真は章末に掲載）

4　鎌倉末期～戦国時代の花尾社

社伝によれば、鎌倉末期から南北朝期以後、この地への島津氏の支配が強まっていくのを裏付けるように、社殿の造営や修築、別当寺平等王院での祈祷や寺領の寄進など、様々な形で島津氏と花尾社とが密接な関わりを持つようになる。

弘長四年（一二六四）
　久経［島津氏三代］、上宮下宮を新建する
正応六年（一二九三）
　忠宗［四代］、社殿を修理する
延文六年（一三六一）
　氏久［六代］、社を再興する
応安四年（一三七一）
　氏久、社殿を修理する
永和二年（一三七六）
　氏久の命により、坊津一乗院二世宥海上人が花尾平等王院にて衆僧を率いて修法を行う（大般若経十二部を真読す）
応永九年（一四〇二）
　元久［七代］弟久豊、花尾平等王院で一乗院三世賢範上人の灌頂（かんじょう）（仏弟子が一定の地位に進む儀式）を受ける
応永二六年（一四一九）
　久豊［八代］、社殿を修理する
文安年間（一四四四～九）
　このころ三六坊あった脇坊も一二坊を数えるまでに減っている（円融院・普賢院・安上院・中道院・神ノ坊・西坊・金蔵坊・菩提院・華蔵院・宗智坊・曼陀羅坊・堅義坊）
明応三年（一四九四）八月
　忠昌［一一代］、社殿を新造す
　　大壇主忠昌、願主郡山地頭村田経安
　　平等王院俊誉・円融院弘吽・普賢院盛秀・吉祥院快宥、
　　惣大工柏木孫三郎道直・美代新左衛門清継

このころ、脇坊はこの円融院・普賢院・吉祥院の三坊を残すのみとなっていた。

永正元年（一五〇四）
　快瑜法印、平等王院の住持職となる
享禄四年（一五三一）
　勝久［一四代］、平等王院へ寺領を寄進する
　（勝久花押）
　満家院東俣大平木場之事、如前々平等王院江令寄附者也、
　早任先例、可有沙汰之状如件、
　享禄四年三月八日　　勝久
　進上　平等王院快瑜法印　侍司
　（「旧記雑録前編一」『鹿児島県史料』二一七六号）
　（勝久花押）
　満家院東俣大平木場之事、如前々急平等王院江令寄附畢、
　然者就快瑜法印成帰寺、於永々後代不可有聊尓相違、
　其外厚地四至方至之堺、曩祖忠久如寄進能々被合首尾、
　悉以平等王院快瑜法印可有執務者也、仍為後日之状如件、

享禄四年三月八日　　勝久
進上　平等王院快瑜法印
　　侍司

（同前、二一七七号）

この勝久の時代には鹿児島清水にも平等王院（談議所とも称される）が建てられ、快瑜はここと花尾の平等王院の住持職を兼帯した。

天文二二年（一五五三）
　貴久［一五代］、拝殿奉殿を修理する
　五月一九日、厚智山花尾権現上宮社が落成する
　大壇主貴久・義辰（義久）、地頭村田越前守経定、
　権少僧都（平等王院）頼国、普賢院快由、当座主宥弁

弘治元年（一五五五）
　一二月、貴久、花尾権現下宮宝殿・上屋を造立する

弘治二年（一五五六）
　貴久、鹿児島清水に大乗院を建立する

大乗院は、貴久が伊集院の荘厳寺を鹿児島松峯山の南麓に移し、荘厳寺九世俊盛を開山に迎えて創建され、弘治二年大乗院三世久誉の時、現在の清水中学校のあたりに移された。

「花尾大権現廟記」によれば、このころ、薩隅日の三州では内訌がしきりに起こり、勢力が分立し、長い戦乱の間に花尾の寺院も領地を失うなどして廃寺が相次ぎ、平等王院および脇坊は衰退の一途を辿っていた。一四代勝久は平等王院の住職快瑜法印を厚遇して寺領を寄進し再興を願うもついに叶うことはなかった（本宗島津氏最後の当主となった勝久自身も同族の争いに敗れ鹿児島を出奔し、豊後でその生涯を終えている。「御身さく寄公にて終り給へるほどなれば、御寄附の事諧（かな）はず」（「花尾大権現廟記」））。

一五代貴久の時代には、花尾山は往時の繁栄は見る影もなく、平等王院はすでに廃絶し、わずかに残った脇坊と社家で廟の世話にあたるという心細さだった。そこで、花尾廟の管理は鹿児島清水に建てられた大乗院に委ねられることとなった。

廃絶した平等王院が再興されるのは、江戸時代に入り、藩主吉貴の治世の宝永五年（一七〇八）にいたってからのことである。

第三節　島津家祖廟―花尾権現

1　江戸時代の花尾権現

加賀藩の前田家、仙台藩の伊達家、薩摩藩の島津家の三家を並び称して「三柄大名」という言葉がある。

この三家はいずれも外様大名の筆頭の格式に序せられた大藩だが、加賀藩の前田は禄高が大名中の最高だったので「高柄」、仙台藩の伊達は領内で米が多くとれ、国が富裕なところから「国柄」、薩摩藩の島津は源頼朝の落胤（らくいん）、つまり名門の出というところから「家柄」をそれぞれ称えていう言葉である。

俗に「三百諸侯」（実際は開幕当初百八十余藩、幕末で二百六十余藩）に列せられた江戸時代の大名家のうち、鎌倉時代以来の家柄を誇るのは島津家や秋田藩の佐竹家などごく一部で、なかでも島津

家は鎌倉・室町と歴史幕府の守護職を勤めた希有の家柄といえる。

島津家は一九代光久の時代に幕府からの公認を受け「源姓」を名乗るようになるが、丹後局伝説をはじめ島津家の創始と深く関わりのある花尾権現が藩主島津家の祖廟として位置づけられ、それに相当する社格に整えられたのもこのころのことと考えられる。

代々藩主と花尾権現廟

下の絵図は、江戸時代初め頃の花尾権現の境内の様子を描いたものである（「島津氏世録正統系図」）。

社殿（御殿・舞殿・拝殿）の前には善神王（仏法を護持する神）の像が二体据えられ、他には毘沙門堂・稲荷社などが見えるだけの簡素な境内である。

毘沙門堂は、「厚地山住僧当料田日記（写）」（承久三年（一二二一）、神主貴島家所蔵文書）などの古い記録にもその名が見え、平等王院開山当初からの起源を持つと思われる寺堂の一つである。

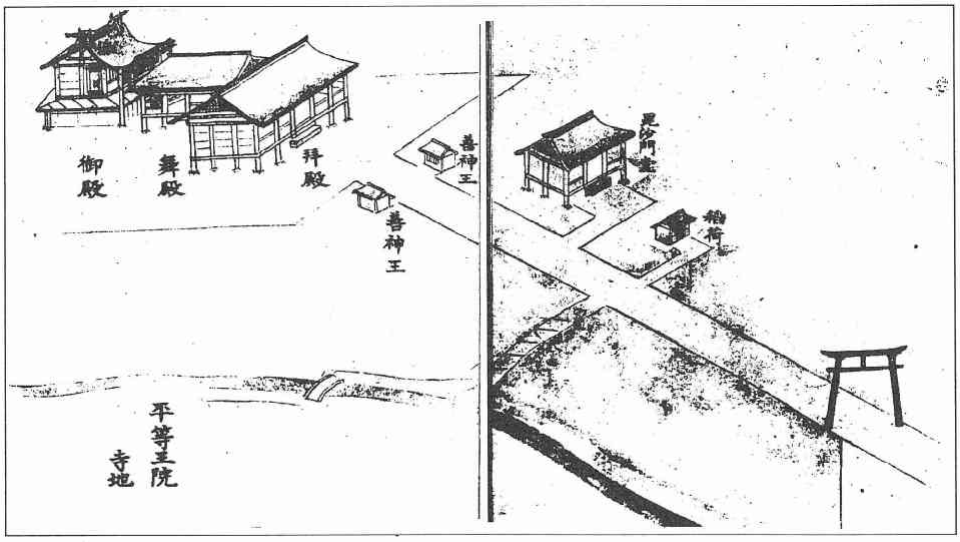
ここには「千体毘沙門」と呼ばれる木像群が安置されていた（「花尾山御宮其外取調帳」によれば、四八四体の木像が奉納されている）。この木像は「毘沙門田」（名前からするともともとは寺領か）という土地を所有していた家にたたりが続くので、その家からたたり除けのために木像を作ってこのお堂に納められたものだという。また堂内には昔の三六坊の本尊とおぼしき虚空蔵菩薩・地蔵菩薩などの朽廃した尊像も安置されていた（「花尾権現註縁起」）。

稲荷社と島津家とは縁が深い。丹後局が住吉大社の境内で忠久を出産した時、夜間雨の中を狐火に守られて出産したとの伝説がある。

寛文九年（一六六九）光久の命を受けて、江戸時代に入って最初の本格的な花尾社殿の造営が行われた。これ以前、貴久の時代の造営から数えると実に百年以上の時が経っていた。

この時、上宮・下宮の社殿や御供所・華表（鳥居）・二王門などが新しくされ、「丹楹（はしら）・刻桷（たるき）、頗る美を尽く」した壮麗な社殿ができあがったという。ここに、近世花尾権現社殿の基礎が形作られた。

以後、代々の藩主によって手が入れられ、『三国名勝図会』などに描かれる



花尾権現境内（島津氏世録正統系図）

ような美しい姿に整備され、世に「薩摩日光」などと称されるようになるのである。

寛文九～一〇年（一六六九～七〇）
光久、上宮・下宮の社殿（宝殿・拝殿・舞殿）・御供所・華表・二王門を新造する
寺社奉行島津出雲久胤、作事奉行満尾五右衛門・平瀬新右衛門、惣大工山崎吉兵衛、塗師主取中村権左衛門、彩色主取寺田惣右衛門
光久揮毫（きごう）の「花尾山」の額を奉納する（のち随身門に掛かる）
仁王門の木像、石像になる（元の木像は妙見社（花尾末社）に安置される）
延宝二年（一六七四）
年々廩米四石を大乗院に給し、花尾の祭料とす（永制となる）
元禄二年（一六八九）二月
綱貴［二〇代］、花尾宮の修理を命じる
丹後局茶毘所に六地蔵塔を立て、丹後局と永金の墓のまわりを石垣で囲んで境内を整備する
丹後局茶毘所六地蔵塔（「花尾大権現廟記」）
石の高さ七尺（約二メートル）ばかりにて、六面なり、上方は面ごとに地蔵の形を刻む、下方の一面に三行の辞を刻む
「花尾権現註縁起」（華海覚慧著）ができる
元禄一一年（一六九八）
花尾権現にて頼朝の五百年忌法要を修める

丹後局御茶毘所跡石塔
（明治八年改修）

元禄一五年（一七〇二）
正月一三日（頼朝正忌日）に花尾権現へ代参（藩主の代理で参詣する人）を立てる（以後定例となる）
元禄一七年（宝永元・一七〇四）
正月一三日、綱貴、花尾権現に参詣し、別当寺の再興を命ず
宝永五年（一七〇八）
吉貴［二一代］、別当寺平等王院および脇坊を再興する
大乗院住持（一九世騰雲法印）、花尾山平等王院を兼帯し、厚地村を寺領とする
二月　平等王院再興
本尊愛染明王　寺領吉田郷佐多浦村権現領門
曼荼羅寺（前号円融院）再興
本尊不動明王（立像、一尺二寸八分、運慶作）
寺領吉田郷佐多浦村宮之原屋敷
六月　本地院再興
本尊阿弥陀如来（立像、一尺三寸八分、恵信作）

寺領郡山小原門

一一月　普賢院再興

本尊普賢菩薩（座像）　寺領郡山福富門

（翌年）　多聞院再興

本尊多聞天（立像）　寺領郡山久保田門

この年、花尾神社の周辺に十六尊の仏を表す梵字が彫刻された町石（一町〈約一〇九㍍〉ごとの道標）が建てられた（このうち十三町を示す町石は、かつての参道沿い、南方小学校跡地近くに建てられていたが、現在丹後局腰掛石の横、六町石の側に移設されている。それらの梵字は廃仏毀釈の際に削り取られた）。

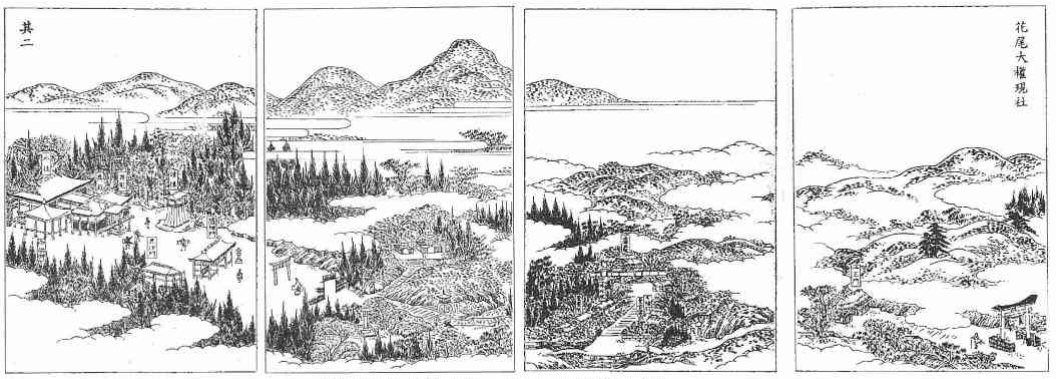
正徳元年（一七一一）

鎌倉相承院より頼朝の鬢髪（びんぱつ）三茎・髪毛二茎を贈られる

享保一一年（一七二六）継豊［二二代］頼朝鬢髪を納めた宝塔を献納する

鎌倉相承院は鶴岡八幡宮の供僧職にあった古刹で、大倉山の麓にある法華堂という頼朝の墳墓堂を管理していた。宝永四年（一七〇七）吉貴が、この寺に安置されていた頼朝護身仏（観音・弥陀・勢至）と頼朝束帯像（白旗宮）を修復し、その礼として、相承院の本尊阿弥陀如来の首に納められていた頼朝の遺髪の一部が平等王院へ贈られることになった。

なお、法華堂の頼朝墓は安永八年（一七七九）重豪［二五代］が五輪塔から層塔に改修し、手水鉢・石灯籠を寄進し、玉垣を廻らすなどして供養を行っている（法華堂跡地である白旗大明神には、



「花尾大権現社」（三国名勝図会）

「頼朝公石塔及元祖島津豊後守忠久石塔道　安永八年己亥二月　薩摩中将源重豪建之」と記された石碑が立つ）。

正徳二年（一七一二）

大乗院領厚地村、公役免除となる

正徳三年（一七一三）

吉貴、花尾権現社を再興する

隋神門が造られ、隋神二体が安置される（「比志島範房花尾山随身門記」正徳三年二月一三日、『旧記雑録追録三』一七一）

鍾楼が建立され、中山王尚敬（ちゅうざんおう）献納の鐘が懸けられる（「花尾山鐘銘并叙」正徳三年四月十日大乗院二十二世住持亮雄謹識、「日置郡地誌備考追録」収載）

この造営によって、花尾の境内は『三国名勝図会』に描かれるような姿にほぼ整備されたものとおもわれる。

享保五年（一七二〇）
　近衛基熙が揮毫した「華尾権現」の額が掛けられる
延享五年（一七四八）
　頼朝五五〇年忌（大乗院にて執行）
宝暦一一年（一七六一）
　一一月　重豪［二五代］初入部、花尾山へ参詣
　重年［二四代］のころには、藩主在府（在江戸）中・在国（在鹿児島）中にかかわらず、頼朝正忌日である正月一三日には花尾権現（および郡山一宮大明神）へ代参を立てること、藩主在国中一度は参詣することが定例になっている。重豪にとってこの年は初入部（藩主になって初めての帰国）にあたる。
安永二年（一七七三）
　琉球国中山王尚穆世子中城（なかぐすく）王子尚哲来聘す
　九月、花尾山へ参詣（扁額献納）
天明七年（一七八七）
　琉球より斉宣［二六代］襲封の慶賀使来聘し、花尾山へ扁額を献納する
　八月、新規に花尾山神主職が立てられ、井上右内が任命される。
　この年、鎌倉相承院法華堂秘仏の髻観音（源頼朝が髻に入れて常に身につけ崇拝していたと伝えられる）の複製が平等王院に納められる
寛政元年（一七八九）
　重豪請願により大権現号の勅許を得る
　宗源宣旨（大権現号の免許状）を廟内に納める
　八月一五日　「花尾大権現」（神祇道管領勾当長上従二位卜部（うらべ）朝臣良倶書）の新額を掛ける（旧額は平等王院に納める）
　九月一五日　斉宣初入部、花尾山へ参詣
　一〇月　「花尾大権現廟記」（山本正誼著）ができる
寛政九年（一七九七）一二月一六～一八日
　頼朝六百年忌の法会を花尾にて執行する
文化元年（一八〇四）丹後局茶毘所六地蔵塔破損
　一二月に再建、開眼供養が行われる
文政九年（一八二六）
　丹後局六百年忌
天保六年（一八三五）
　八月　丹後局石塔倒木により損壊
弘化四年（一八四七）
　斉興［二七代］、勢至菩薩・頼朝笏を奉納する
　一一月一一～一三日　頼朝六五〇年忌法会を花尾社頭にて催す
嘉永四年（一八五一）
　斉彬［二八代］初入部、花尾権現に参詣
　九月三日　七ツ時出御、川頭筋を通り、下平・黒岩にて小休止、九ツ時平等王院へ着、参詣。丹後局・永金廟所、郡山一之宮大明神にも参拝し、夕七ツ時帰殿。城下より片道約四里の行程
嘉永五年（一八五二）
　斉彬、社殿を改修する

元治元年（一八六四）
「花尾社伝記」（伊地知季安著）ができる

別当寺再興と愛染明王像

戦国末期の花尾は、別当寺本寺の平等王院が廃絶し、塔頭（たっちゅう）はわずかに円融院・普賢院・吉祥院の三ヶ寺を残すのみとなってしまった。それが近世初頭の万治年間（一六五八～六一）には円融院一寺となり、その円融院も住持盛誉が加治木の普門院に転住して、花尾山の寺院はついにすべて廃絶に至ってしまった。

このような状況で、延宝二年（一六七四）には鹿児島の大乗院に対して花尾廟の祭祀料が施されるなど、近世初頭、花尾廟の管理はこの大乗院に任されていた。

元禄一七年（一七〇四）になってようやく花尾権現別当寺の再興が決まり、宝永五年（一七〇八）から翌年にかけて平等王院以下、曼荼羅寺（もと円融院といったが天皇の諡号と同じなので遠慮して改めた）・本地院・普賢院・多聞院の五ヶ寺が再興された。

時の藩主二一代吉貴は、神仏の崇敬厚く、花尾の寺院を再興した他、宝永七年（一七一〇）には鹿児島の南泉院を再興し、享保二年（一七一七）四月に焼失した浄光明寺（吉貴の菩提寺でもある）を再建するなど、寺社を手厚く保護したことで知られる。

ところで、「平等王院」という名は、この寺の本尊である愛染明王に由来しているという。

愛染明王は別名「平等王」ともいい、三目六臂、忿怒の形相が特徴的で、全身を赤く塗った姿をしたものも多い。この愛染明王を本尊として敬愛や調伏・息災などの目的のために行う密教の修法「愛染王法」は、平安末期、天皇や貴族の間で盛んに行われた。またこの修法は戦勝祈願や天変地異の祈祷にも用いられることから武家の信仰も篤かった。後には民間へもその信仰は広がり、江戸時代には恋愛・美貌の神様として信仰を集め、特に水商売の女性の守り神として人気が高まった。

花尾山平等王院の本尊である愛染明王像は別名「谷渡愛染明王」あるいは「五指量愛染明王」ともよばれた。この像は、弘法大師空海の作と伝えられ、谷渡の藤の枝を使って彫られ、高さは五本の指を並べたくらいの小さな像だったのでその名が付けられたという。

空海は初めこの像を嵯峨天皇に献上し、天皇から眞雅僧正（空海弟）に下賜され、僧正より在原業平へと渡り、その後人手を経て源頼朝の所蔵するところとなった。そして頼朝から島津家初代の忠久へと伝えられたこの愛染明王像は、花尾山平等王院に本尊として納められることとなった。

それから時は下り、一六世紀の前半、鹿児島の清水に建てられたもう一つの平等王院にこの愛染明王像は移された。時の住職は快瑜法印といい、快瑜は桂庵玄樹の門人以安巣松らと親交を結んだ文化人として優遇され、この寺は世に談議所ともよばれ、文人学僧の会する場所となった。

ところが、島津氏の後継争いが激化する中、快瑜は戦火を避けて本尊愛染明王とともに鹿児島を離れることとなった。南薩・大隅を転々とするなか、愛染明王像は同行した弟子の典瑜へと託された（快瑜はのちに花尾へ戻りこの地で亡くなっており、参道脇の石塔

群の中には「天文十二癸卯六月十三日（一五四三）　法印快瑜」と誌された墓（宝篋印塔）がある）。

快瑜の弟子典瑜はその後、高山高崇寺の住職を勤め、永禄一〇年（一五六七）高山より坊津に移り、天正五年（一五七七）坊津一乗院の住職となったが、その間師から託されたこの愛染明王像を大切に守ってきた。

一六代当主となった義久は、この頼朝伝来の愛染明王像の存在を知り、ぜひにもと懇望して典瑜からこの愛染明王像を譲り受け、愛染明王像は義久の秘蔵するところとなった。

義久はこれを鹿児島大乗院に祀らせ、年に一度、六月一日には城内に置いて修法を行わせた。愛染明王像はその後、城内にある護摩所に安置され、以後島津家の重宝の一つとして、伝来の刀剣・古文書類と共に歴代藩主の手にうけつがれることになったのである。

宝永五年、花尾山平等王院再興にあたって本尊としてここに祀られたのは「谷渡愛染明王」とは別のものだが、義久・義弘・家久・光久と代々譲り伝えられ、島津家にとってはやはり由緒ある愛染明王像だという。この像は光久からいったん五男の久達（佐多家）に与えられたが、久達はこれを改めて献上し、再興された花尾平等王院の本尊として祀られることになったという。こちらの愛染明王像もやはり弘法大師の作と伝えられ、像の高さは蓮台まで含めて二寸七分（約八センチメートル）と伝えられる。

2　寺社家の格式と神主貴島家

寺社家の格式

江戸時代、花尾山には平等王院・曼荼羅寺・本地院・普賢院・多聞院の五ヶ寺および神主職が置かれていた。

寺社家の格式でいえば、いずれも藩主御目見の格に列せられ、なかでも花尾権現別当職にある平等王院と神主職は諸寺門首同等の格を与えられ、平等王院は南泉院・福昌寺につぐ席次に序せられた。当時、鹿児島藩内には、千以上の寺院、四千以上の神社があったが、そのうち御目見を許された寺社（僧侶・山伏・神主）は二〇〇以下で、各宗門の筆頭である門首の格はそのうちの三〇ほどにかぎられる。

平等王院住持は大乗院住持が兼帯し、他の四ヶ寺は大乗院の末寺に組織されている。いずれも末寺は持たず、寺領はそれぞれ一ヶ所で、平等王院には二〇石、他の四ヶ寺はそれぞれ二五石の寺領高が附けられている。（鹿児島藩内の寺社領の総計は、寺院が一万一六三六石（二七三ヶ所）、神社が三三七七石（一九ヶ所）で、大寺では寺領高が福昌寺（一三〇〇石余）・大乗院（九〇〇石余）・南泉院（五〇〇石余）などだった。）

花尾権現に神主職が置かれたのは江戸時代後期、天明七年（一七八七）のことである。このとき神主職には井上右内が任ぜられ、井上家は神主号叙爵の家となり、代々駿河守・志摩（播磨）守・備前守などを名乗り、大宮司号・惣大宮司号などを許可され、鹿児島の諏訪・福ヶ迫諏訪神主家と並んで門首の格を与えられた。

神主の切米（扶持）は二五石で、屋敷として宮近辺に六〇帖敷程の家作が与えられている（なお居屋敷は城下にもあったとみえ、幕

末の城下絵図には「井上駿河」宅として現加治屋町付近に屋敷地が確認される）。社家両人（有屋田・園田）が附けられ、それぞれに切米四石ずつと三〇帖敷程の家作が与えられ、両社家は権大宮司号を許可された。

神主貴島家

先に見たように戦国末期から近世初頭までの花尾は、社殿の造営も約百年間中断しており、別当寺平等王院以下塔頭が次々と廃絶し、寺の由緒を示す文書なども散逸してしまったようである（「座主断絶するに依て座主所持の文書書き物等箱に入れて有して、初めは円融院の明き寺に置き、寺破壊の後は御供所の梁上に置きける故に皆散在」（「花尾権現註縁起」））。

こうしたなかで貴島家・是枝家・成枝家という三家が社家として花尾廟を守っていた（後に是枝家・成枝家は他郷に移った）。

貴島家の家譜によれば、貴島家の先祖蔵人源頼兼は兵庫頭頼政（源三位）の三男で、文治三年（一一八七）出雲国に下向して杵島郷に住み、貴島氏を称した。その後鹿児島へと下り、花尾権現創建のころから大宮司職を務めてきたという。

江戸時代の貴島家は郷士格に取り立てられ、「代宮司」という職の社家として花尾権現に仕えている（貴島家所蔵文書）。

一代々御小姓与格
一御切米五石
花尾社代宮司
貴嶋甚兵衛
右家之祖貴嶋蔵人頼兼事、兵庫頭頼政之三男ニ而文治年中出雲国ニ下向、杵島郷ニ致居住、初而貴嶋氏を名乗、其後御当国江参、花尾社御創建之比より大宮司職相勤、爾来代々代宮司等勤来家筋旁別段之御取訳を以此節被召出嫡々迄右之通被仰付、家内代々郡山衆中被仰付、御切米被下置、勤向之儀者何篇是迄之通被仰付候、
左候而是迄応日数被下候御扶持米者不被成下候、
右御格之通可申渡候、
（年不明）四月　刑部

3　花尾権現と厚地村

江戸時代、厚地村は郡山郷の他村と異なり、大乗院の支配下にも置かれ、花尾権現に奉仕する村として位置づけられていた。

大乗院は弘治二年（一五五六）の創建以来、当時ほとんど廃絶に至っていた別当寺平等王院の代わりに花尾廟の祭祀を託されていた。宝永五年（一七〇八）厚地村に平等王院が再興された後も住職は大乗院が兼帯することとなり、普段は大乗院から平等王院へ「看坊」（留守居の僧）が派遣され、花尾廟の管理を行い、年間に二〇回以上を数える祭礼などを司っていた。なお正月一三日（頼朝忌）・一二月一二日（丹後局忌）の両忌日は大乗院の住職が勤めた。

厚地村は大乗院領となり、正徳二年（一七一二）には厚地村に対して公役免除の特権も与えられている。

厚智村之事、被対　花尾権現神霊百姓共村役等之儀、此節より

梵字碑

神社参道にある。嘉永四年（一八五一）建立。

正面に正徳二年の令達が、側面・背面には当時の厚地村の公役に関する規定が明文化され、刻まれている。

谷山之内宇宿村同然被仰付候、至後年可被存其趣者也、
正徳二年辰九月十八日　肝付主殿判
種子島弾正判
島津帯刀判
島津将監判
大乗院

（『旧記雑録追録三』八八）

谷山郡宇宿村は鹿児島福昌寺の開山当初からの寺領である（応永六年（一三九九）二月の島津元久寄進状には「万雑公事諸役等悉停止」、つまり公役免除の規定がみえる）。厚地村については、この宇宿村「同然」に、「村役」つまり公役の負担などを免除するといった特権が与えられていたものと思われる。

権現領の境界石

花尾神社には花尾権現領の境界についての最も古い文書（写本）として、次の史料が伝わっている。

薩摩国満家院厚地山大境之事
一秋吉の西のはなよりはしめてほしかせたうの尾をかきり
一はしか山せとのくち松をの原道をかきり
一ゆの木の谷の道しら薄のさこをかきり
一なすひ田西の尾を猿おとしほきの上道をかきり
一ゆすの木の原めんをかきり
一水かうちはりこ谷夕かくら道をかきり
一土せとの口いゝちの尾まちはへうへの合内くぬ木つかより中の木場ふみわたしてしりかくめの坂佛の尾をかきり
一楽の木場屋敷半分厚知領ふくりきりのとゝろやたけのつしたまり水の尾をかきり
一あふき山の尾をかきり花尾嶽の社柱二本大隅其よハ厚地領杉のせたうすはる松の尾をかきり
一丸山の堂柱二本ハ厚智領二本大隅
一境の原尾をかきり一王子の馬場をかきり王子の山田多羅くちをかきり
仁治三年甲（壬か）寅拾月十四日、やうきん定之、

これは、厚地山権現の創建間もない仁治三年（一二四二）に平等王院の開山永金が定めたと伝えられる（実は、近世の領域確定の際に作成された）もので、これによれば、厚地の領域は郡山郷の東俣村・油須木村・郡山村および入来郷・蒲生郷・吉田郷の村々と接し、

境界線の大部分は八重山～花尾山～三重岳へと連なる山中にも広くまたがっている。

江戸時代、この境界を接する村々と厚地村との間でしばしば境界争論が起こったので、郷役や藩の役人などの立ち会いのもとで「縄引」と呼ばれる境界の確認が実施された。その際、確定した境界線の目印としてこのような境界石が立てられた。

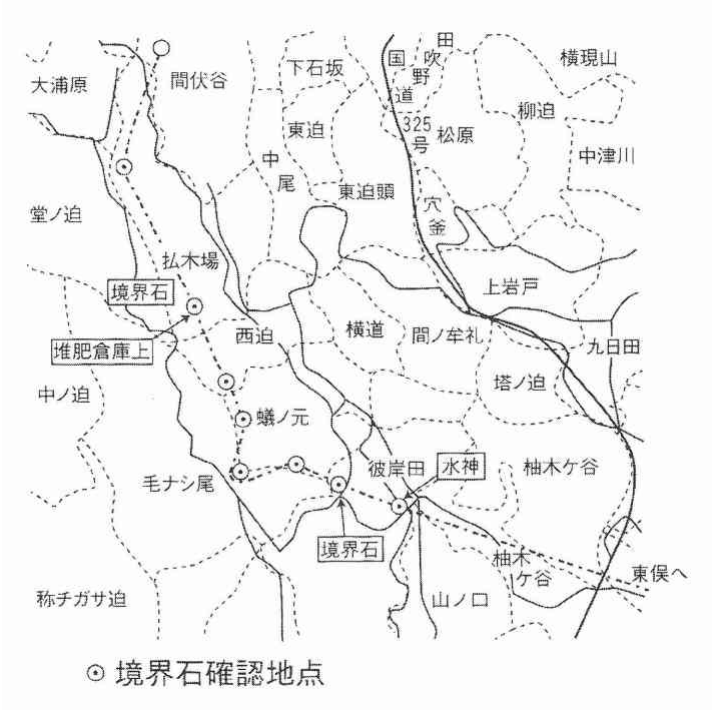
境界石（大浦字彼岸田）

花尾山領　御縄引
従是東厚地村
天明改元　辛丑　十月六日

左側面（郡山郷・大乗院役人）
曖　肥後善兵衛
同横目　川野貞右衛門
郡見廻　白坂喜右衛門
検使　善聚院

右側面（藩役人）
御目附　木場次郎兵衛殿
郡奉行　市来新右衛門殿
山奉行　川村四郎左衛門殿
寺社方取次　岩山四郎殿

厚地村境界石は、平成一六年現在、郡山村と油須木村境に七基、東俣村境に四基が見つかっている。



4　江戸時代の祭礼

「花尾権現御祭之事」（享保一三年（一七二八））によれば、花尾権現では年間に二〇回以上の祭礼・行事が、大乗院・平等王院・代宮司・村役などの采配で執り行われ、そこに厚地村の人々が門（かど）ごとに奉仕する形で携わっている。また藩主や家老など貴人の参詣がある時や境内の手入れにも厚地村の人々が人足として動員された。

また花尾山頂の熊野権現社のほか、厚地村には妙見社（社殿近く

の岩窟にあり）、荒神・山王（字岩戸）、六所権現（字久保山）などが花尾の末社として祀られていた。

正月元日　等堂王院かん房
二日　御祭　厚地村庄屋
三日　本地堂御祭り　代宮司　福永門・田中門
七日　御祭　谷口門
一二日　御祭　大乗院
一三日　代参
二月　彼岸入御祭・神楽舞　福元門・所中
三月三日　御祭　かん房・大（代）宮司・庄屋・本触　今別府門
四月一五日　御祭　盛満門
五月四日　御祝物　大平門
五月五日　御祭　田中門
五月　皐月神楽　所中
六月一五日　祇園御祭　大平門
七月七日　脇門
八月　彼岸入御祭・神楽　茄子田門・所中
九月九日　御祭　米倉門
一一月朔日　御祭　久保田門
一一月　初申御祭　代宮司
一八日　岩戸山之神三社・荒神社　岩戸門
六社（所）権現現御祭　代宮司　久保山門
花尾山御嶽熊野三社大権現御祭　坂口門
二四日　御祭　薗田門
二八日　妙見御祭　代宮司　永田門
一二月一二日　御祭　大乗院
花尾山いんす御祭　等堂王院かん房
一二月一五日　御祭　上床門

5　廃仏毀釈

江戸時代を通じて、歴代藩主の第一の崇敬によって庇護されてきた花尾権現も、明治元年（一八六八）の神仏分離令を機に、その姿を大きく変えることになる。

廃仏毀釈が全国的な運動として展開するのは明治初年のことだが、薩摩藩では早くも慶応期には復古神道の影響を受けて、廃仏の思想が藩の政策に取り入れられつつあった。そこには当時藩政が第一に優先していた軍備拡張を推し進めるためにも藩費の中で大きな負担となっていた寺院の維持費を削減したいという藩の意向が大きく反映していた。

慶応三年（一八六七）四月、

廃仏毀釈の痕跡

「花尾神社」（神仏習合思想の象徴である権現号も廃止される）に対して、別当寺を廃止し、祭祀を「神道一篇」にせよとの通達が出された（「廃寺之節花尾山江仰渡之写」）。

これによれば、平等王院は花尾山の別当寺を廃され、大乗院へ合院となり、その他の脇坊は廃寺となり、僧侶は還俗を命じられた。

平等王院とそれに付属する愛染明王堂などの堂宇や脇坊、境内にあった鐘楼や二王門などは取り壊され、由緒ある仏像仏具などは大乗院に引き取られたが、丹後局茶毘（だび）所にある六地蔵塔や町石などに刻まれた仏像・梵字にいたるまで、境内周辺の仏を象徴するようなものはすべて削除するよう命じられた。寺領は没収され、神社の祭祀や社家の所務料にあてられるほかは、当時藩の軍政改革によって新設された海陸軍方などへ配分されることが決まっている。

第四節　花尾神社の宝物

1　神像

「花尾権現註縁起」はこの三像について、「社内正面の厨子は頼朝公の木像、束帯厳然たり、左の厨子は永金阿闍梨の木像、法服衲衣威儀あり、右の厨子は丹後局の木像、容儀温如たり」と伝えている。また「三体共に秘尊なる故に、古より社職の僧も猥りに厨子を開き拝し奉こと」は禁じられていた。

江戸時代の前期、三代藩主光久の命により、藩内の諸家に伝わる文書や寺社縁起などがくまなく調査されることとなり、この時は特別に花尾権現の内陣も開扉され、秘蔵されてきた御神体などの神宝類も図像として記録された。

明暦三年（一六五七）五月初、築瀬善右衛門は諸外城に伝わる古記録の調査のため花尾権現にやってきて、丹後局の石塔や茶毘所など、神社周辺の様子や伝説を社家の貴島甚兵衛から聞き取り、社内に納められていた書物等をあらためていった。同年一〇月、光久の命を奉じて、家老鎌田政昭は大乗院の僧と絵師寺田惣右衛門を花尾権現に派遣して、内陣を開かせ、そこに納められていた神像や神鏡・霊鏡などを絵師に描き写させている（「花尾権現宮記録」（成立年不明）・「花尾社伝記」）。

以後は「堅固に之を封じ、寺僧神職と曰とも仮にも内殿を開くこと」はなく（「花尾権現註縁起」）、藩主参詣の時にだけ内陣が開帳されるしきたりになった（宝永七年（一七一〇）八月、『旧記雑録追録二』二九七八）。

このとき写し取られた図像は、文書奉行（後の記録奉行）の平田純正らによって編纂された「島津氏世録正統系図」に載せられている。

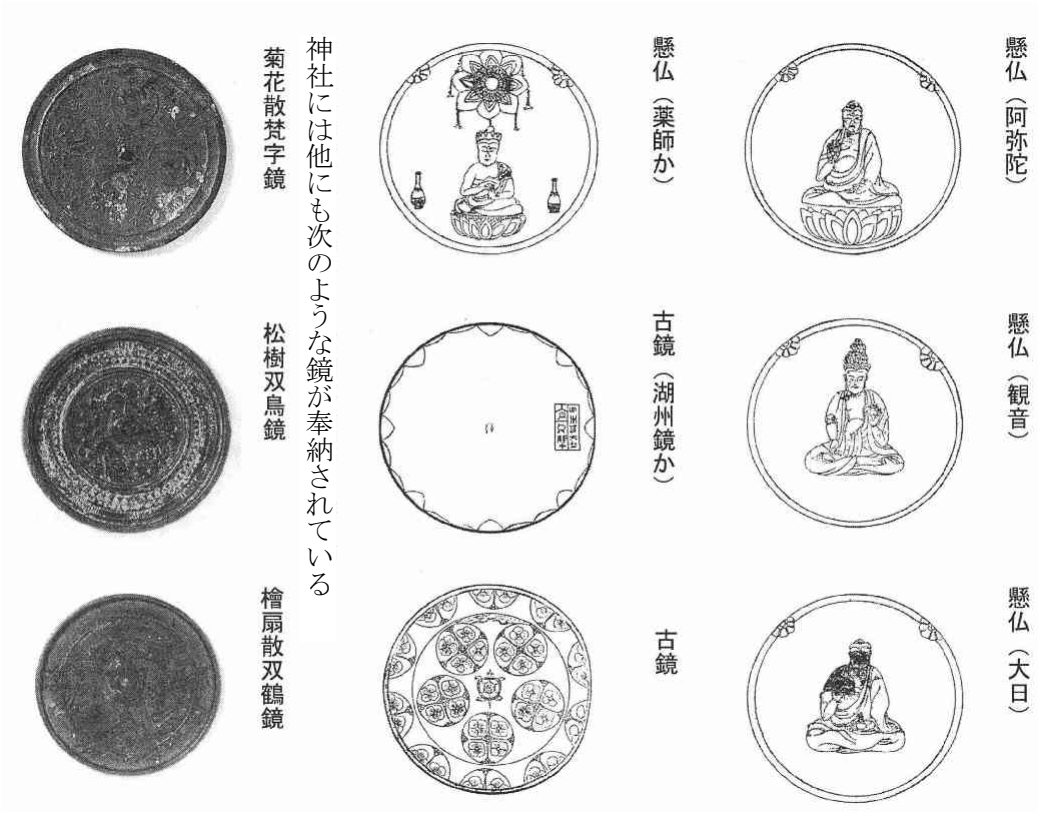
この三像については、花尾権現が熊野権現の勧請であることを考えるならば、もともとは熊野三所権現の神である本宮（家津御子神、本地は阿弥陀如来）・新宮（速玉神、本地は薬師如来）・那智（夫須美神、本地は千手観音）の神体三座として作られ、祀られたものと考えることもできる。なお、熊野三所権現が垂迹曼陀羅（神道曼陀羅）などにおいて神影像として表される時には、本宮＝法体（僧形）、新宮＝俗体（男神）、那智＝女体（女神）の姿をとって描かれることが多い。

2　奉納鏡・太刀・書・額など

記録（「花尾山御宮其外取調帳」など）によれば、江戸時代花尾神社には代々の藩主・重臣あるいは琉球からの賓客らから、鏡・太刀・書・額などが多数奉納されてきた。なかには源頼朝ゆかりの品などもあり、現在も宝物として大切に保管されているものもある。

○奉納鏡

先に紹介した正体鏡とともに御神体として内陣に納められていたもののなかには、懸仏式の鏡（懸金具のようなものが上方左右に取り付けてある）や、裏に文様のある古鏡も含まれていた（図は「島津氏世録正統系図」）。



蓬莱鏡

元禄九年丙子三月二十二日

箱書

「奉寄進　御鏡一面

鬼丸彦三女

内田道圓　壽七拾有一歳妻」

蓬莱鏡

銘「小橋豊後守藤原友重」

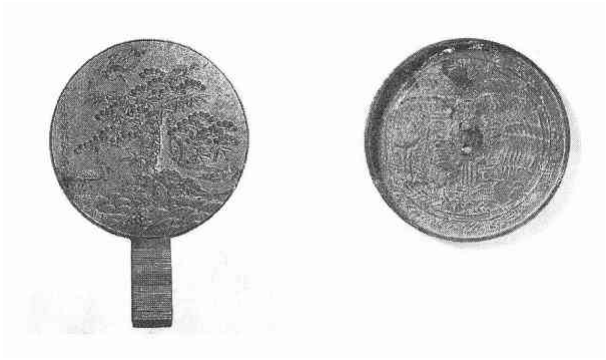
箱書

「御願成就

八寸鏡一面　三拾五歳女

文化八未三月九日

平等王院看坊　照範」



○花尾権現額

裏「享保五年八月九日　基熙書

勅額師　佐竹宮内重成」

この「華尾権現」の額字は江戸中期の公家近衛基熙の揮毫によるものである。

正徳三年（一七一三）藩主吉貴は花尾権現の社殿を再興した際、近江葦浦観音寺（滋賀県草津にある平安末創建の天台宗の古刹）の住僧願應院僧正を介して、神前の額の揮毫を基熙に依頼している。基熙は関白・太政大臣を務め、将軍家とも縁戚関係にあった（娘熙子は徳川家宣の御台所）。花尾権現再興の七年後の享保五年（一七二〇）に京都で調額され、この年花尾権現に掛けられている。

○金幣二本

元禄六年（一六九三）九月　島津図書久竹奉納

○刀一腰　銘「薩州之住藤原行広」

宝永二年（一七〇五）七月　藩主吉貴寄進

○太刀一腰　丹後守兼道作

宝永二年八月　嶋津勘解由久当寄進

○刀一腰　銘　肥後守法成寺橘吉次　白木鞘

宝永二年十二月　島津帯刀忠雄寄進

○太刀一腰　銘　薩陽鹿児府住源國寛作

宝永三年（一七〇六）四月　島津大蔵久明寄進

○宝剣一振　大和鍛冶作　長七寸一分　号神来

享保三年（一七一八）正月十一日　藩主吉貴寄進

○大舎利塔　一基（四方開の厨子入）

○花尾大権現号宣旨

○花尾大権現幣帛

○御廟記　一通　斉宣筆

○蓮亭院（斉宣継室）詠歌短尺　三枚

春社　ゆふ日さす花の色ゆふ色そへて

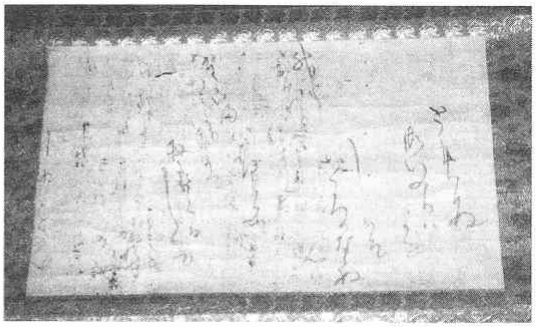
このまにみゆるあけの玉垣

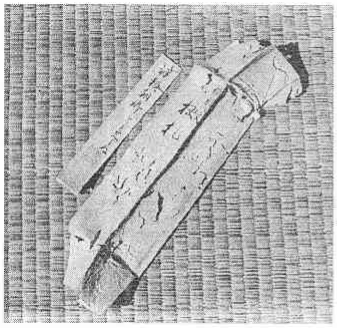
春衣　心をも春の衣に染そへて
　たれとにふなく匂ふ花のか
春風　野辺山へ吹ともみへす春かせの
　かすみてなひく空そ長閑き
　題書　飛鳥井大納言雅威卿
　文化五年（一八〇八）正月　奉納
○斉宣詠歌短尺　三枚
　うつらなく野辺のちくさをふみ分て
　露打はらふ秋のかり人
　うちわたす船路も遠き波の上に
　光をそへてすめるつき影
　しも雪になを一しほのいろそへて
　いつれときはの松のいく千世
　文化十四年（一八一七）四月　奉納
○普門品（経典）　折本
　文政四年（一八二一）三月　藩主斉興寄進
○木色塗桐箱二ツ　大小
　仏舎利　三顆
　由緒書　一巻
　文政四年四月　藩主斉興奉納
○勢至菩薩一体（厨子入）　康湛作
　法橋七條左京康敬の極状あり
　弘化四年（一八四七）　藩主斉興奉納

3　頼朝ゆかりの品

○頼朝公御真蹟御掛物一幅　寛政元年（一七八九）九月奉納

とゝめ候ぬ
御いのりハよくゝし候そ
をろかならぬ心ハ
神もあハれとやこうむすらんと
おほし候て歟
たゝいまかみよりをもひて
あたもくるしくて
よみをかれすや
候ハんすらん
（封）
十日　ゐんとのへ


頼朝真蹟掛物


極　札

［極札］
源頼朝卿　とゝめ候ぬ（印）
［裏］
（印）
仮名文　乙卯三（印「神田道伴」）
（写真・解読文　五味克夫氏による）

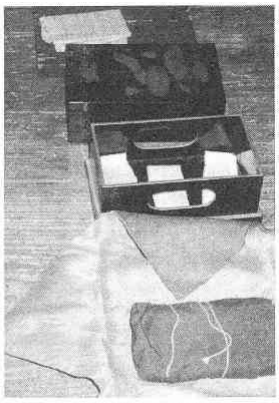
伝源頼朝真跡の仮名消息（断簡）である。藩儒赤崎貞幹が、親交のあった古賀精里を通じて譲り受けたという記録があり、古筆鑑定家の極札が付く（「源頼朝公御真蹟書写一件」）。

赤崎貞幹（源助、一七四二～一八〇五）は谷山郷士出身。肥後の藪孤山などに儒学を学んだ。重豪に登用され、聖堂教授・側役格に進み、江戸昌平黌の式日講釈を勤めた。古賀精里（弥助、一七五〇～一八一七）は佐賀藩出身。京都で朱子学を修め、藩校の教授などを勤めた後、幕府の儒者に任ぜられた。柴野栗山・尾藤二洲らとともに「寛政の三博士」とも称される。

○頼朝公鬢髪（五筋）

○髻観音（長二寸銀仏）

頼朝公鬢髪は、正徳元年（一七一一）鎌倉相承院より贈られ、享保一一年（一七二六）藩主継豊が花尾権現に献納したもの。藩主斉宣の時代に複製された頼朝の護持仏髻観音および藩主斉興が奉納した小舎利塔とともに二重厨子の中に納められてあった。



髻観音・鬢髪

○頼朝公御笏

この笏は、弘化四年（一八四七）に藩主斉興が奉納した。

調所広郷の添書がある。鎌倉相承院より薩摩の仏工鳥居如見が譲り受け、文化一二年（一八一五）如見より五代後の子孫より藩主に献上された。護符として用いられ、安産にも虫除にも効果があるという。

4　琉球扁額

花尾神社には琉球から五枚の扁額が贈られている。

いずれも木製の額で、黒あるいは朱の漆地に堂々とした金文字の書体が映える。琉球独特の漆の塗りと額縁を彩る龍文などの装飾が異国情緒を醸し出している。

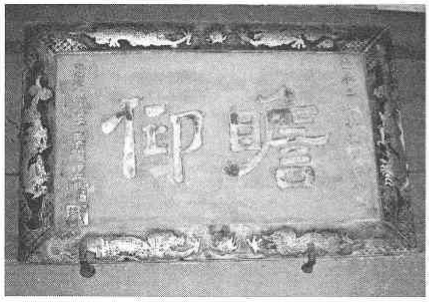
琉球扁額は、東俣の一之宮神社（天明七年奉納）や指宿の枚聞神社などにも奉納されており、謝恩使・慶賀使の一行が江戸上りの際に揮毫したものが福岡・大阪などにも残されている。

花尾神社にある扁額のうち二枚は安永二年（一七七三）中山王尚穆世子中城王子尚哲が薩摩藩主への謁見のため鹿児島を訪れたときに奉納されたものである。このとき一行は六月に那覇港を出立し、七月末鹿児島に到着。八月一八日登城し、藩主重豪に謁見している。鹿児島滞在中、一行は九月初めに花尾山に参詣したほか、城下南泉院・浄光明寺・福昌寺・聖堂に参詣、福山野駒取、吉野関狩を観覧し、霧島神社・大隅国正八幡宮にも参詣し、翌年三月帰国の途についた。

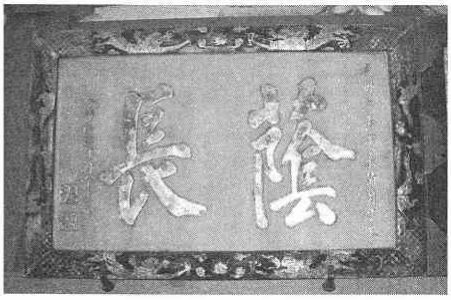
残る三枚は天明七年（一七八七）斉宣襲封の慶賀使として上国した今帰仁按司朝賞らが奉納したものである。

これら扁額の贈られた背景については第七編第七章に詳しい。

安永二年癸巳菊月穀旦
「澤敷海國」
中山王世子尚哲謹立



安永二年癸巳賓鴻吉旦
「瞻仰」
球陽摂政尚和読谷山王子朝恒謹立印印



天明七年丁未菊月吉旦
「蔭長」
今帰仁按司朝賞謹立

天明七年丁未菊月吉旦
「朝宗」
琉球国使者　幸地親方良篤
安次富親方良頭
渡慶次親方真厚
阿波根親方朝紀

（黎明館に寄託）

天明七年丁未菊月吉日

「無斁」

琉球国使者　盛島親雲上朝朗
伊集親雲上朝義
冨里親雲上朝永

扁額に書かれた言葉の意味は、

・澤敷海国（たくふかいこく）…広くあまねく恵み潤う海国
・瞻仰（せんぎょう）…仰ぎ慕う、仰ぎ見る
・蔭長（いんちょう）…大いなるお陰、助け
・朝宗（ちょうそう）…諸侯が天子に拝謁、帰服すること
・無斁（むと）…厭（いと）うことなし（仲違いすることがない）

と、航海の無事を感謝し、琉球と薩摩の関係を言祝（ことほ）ぐ（祝いや喜びの言葉を述べる）表現になっている。

第五節　町外の花尾神社

江戸時代には鹿児島清水の大乗院の鎮守として花尾権現廟宮が祀られていたほか、島津氏領内各地に花尾社が祀られていたという記録が残る。

現在は県内の吉田町と喜界町に花尾神社の分社がある。

大口（曽木広徳寺）の花尾社

『三国名勝図会』によれば、大口市曽木本堂にあった臨済宗広徳寺の境内には、頼朝および丹後局・比企能員のものと伝えられる五輪塔があったという。これについて「花尾社伝記」は、明応八年（一四九九）に大口城に入った島津出羽守忠明が「花尾三所」としてここに祀ったものと伝えている。

国分清水城の花尾社

永禄七年甲子、先是、隅州清水城、有守公神社、以住吉・止上両社、既祔于此、至是、義久公命有司一新社殿、又祔花尾三所、而中崇頼朝公、左崇忠久公、右崇丹後局、三月七日落成、時公乃以守護職大壇主、令姪又四郎征久為守護代、町田治部為小守護代、小島三河守喜縄為願主、各以任預焉、

（「花尾社伝記」）

永禄七年（一五六四）、国分清水城内に住吉社・止上社とともに花尾三所（頼朝・忠久・丹後局）を祀る社殿が島津義久によって建てられた。

清水城は、戦国期本田氏の拠城で、天文一七年（一五四八）島津貴久に攻められ、貴久より弟の忠将に与えられた。慶長二年（一五九七）忠将の子以久（征久）が種子島に移され廃城となる。

国分金剛寺の花尾社（慶長九年（一六〇四）創建）

義久公国府の城の鎮護の為に其の鬼門に当て五峯山金剛寺を草創し玉ふ時、花尾権現を勧請す、彼の社内は頼朝公・丹後局・忠久公なり、今に彼の寺の鎮守なり、

（「花尾権現註縁起」）

五峯山龍護院金剛寺并花尾権現社

上小川村新城の西南の麓に貫明公（義久）創建

寺内に花尾権現廟あり、鎌倉右大将公、丹後局、得仏公（忠久）の三座あり、貫明公奉祀し玉ふ、祭九月九日、

（『三国名勝図会』）

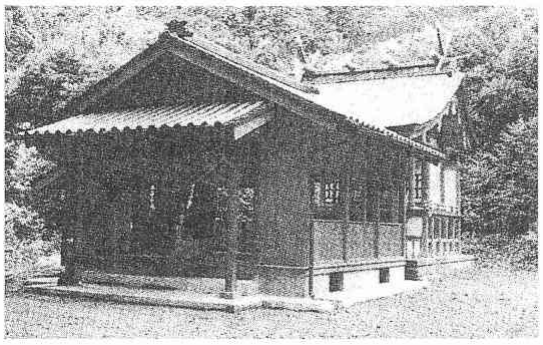
吉田町の花尾神社

吉田町本城にある。

祭神丹後局、例祭日は一二月五日。

三月五日からの春祭りや棒踊り・田打神事（木鍬をもって境内を掘り青葉をまき、牛使二人が木牛を引いて土をならし籾種子を播いて豊作を祈願する）などの神事・芸能が伝えられる。

神社の由緒は詳らかでないが、昔は高牧山の中腹天狗山の上に丹後局の分神を祭っていたが、参拝のため急坂を登るのが困難なので、元禄以前にすでに現在の位置に遷されたという。昭和二年（一九二七）に改修が行われ現在に至る。境内には安永八年（一七七九）銘の石灯籠などがある。



吉田町の花尾神社

花尾八社大明神祠

本城村に在り、

神体木像八体・鏡一面、其木像八体共に銘文あり、

文明十二年（一四八〇）庚子十月廿七日、大檀那息長氏康清并孝清、大願主律師主萬、作者権律師快教と記せり、

鏡の裏に奉施入花尾八社大明神御正体、願主藤原女、文明十三年辛丑霜月朔日と記せり、

例祭二月五日・十一月五日、境内に若宮大明神・狩長大明神の二小社あり、

杉二株本社の前左右にあり、囲二丈四尺余、享保年中、官に請て船材となさんとする者ありき、既に免許を蒙りて是を伐んとす、其夜本より梢に至り破裂して用ゆべからず、其事遂に止む、因て神木と伝称せり

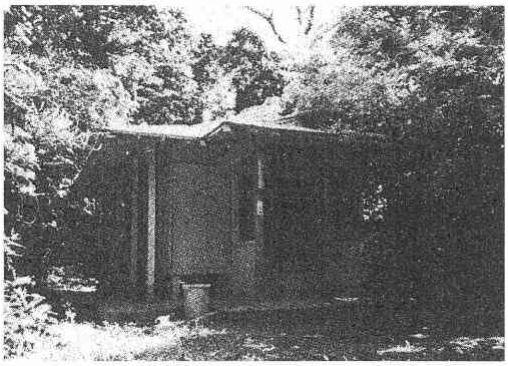
（『三国名勝図会』）

喜界町の花尾神社

喜界町手久津久（てくつく）にある。

源頼朝・丹後局・島津忠久および島津重豪・島津斉彬を祭る。

慶応二年（一八六六）手久津久村の山口憲徳の請願により、当時の花尾宮司井上駿河守の許可を得て創建された。御産の神様としての花尾神社の神徳にあずかりたいという願いから、郡山から遠く離れたこの島に花尾神社が勧請されることになったという。



【参考・引用文献】
「紀行篇画帖　上」…鹿児島県立図書館所蔵
「花尾大権現廟記」…『三国名勝図会』所収
「花尾社伝記」…鹿児島大学所蔵
「花尾大権現註縁起」…「日置郡地誌備考追録（下）」所収、東京大学史料編纂所所蔵
「島津氏世録正統系図」「島津世家」「秘伝島津譜図」「源頼朝真蹟書写一件」…東京大学編纂所所蔵
「薩摩国満家院厚地山大境之事」「花尾権現御祭之事」「廃寺之節花尾山 江仰渡之写」「花尾権現宮記録」…鹿児島県歴史資料センター黎明館所蔵

第六節　社殿天井絵に描かれた植物

天井絵の植物名

◇双子葉植物　合弁花類

キク科　キク、キツネアザミ、サンシチソウ、タンポポ、ツワブキ、ヒメヤマアザミ、ヒヨドリバナ、フジバカマ、ヤナギアザミ、ヤマシロギク、ヨメナ

キキョウ科　キキョウ、サイヨウシャジン、サワギキョウ、ツルギキョウ

オミナエシ科　カリコソウ

スイカズラ科　スイカズラ、ニワトコ

ゴマノハグサ科　キリ、スズメノトウガラシ、ホソバヒメトラノオ

ナス科　ヒヨドリジョウゴ、マツリカ

シソ科　オドリコソウ、カキドウシ、ハッカ

クマツヅラ科　クサギ

ムラサキ科　クサキョウチクトウ、ムラサキ、ヤマルリソウ

ヒルガオ科　アサガオ、ヒルガオ

ハナシノブ科　ハナシノブ

アカネ科　クチナシ、サツマイナモリ、ハシカグサ、イナモリソウ

キョウチクトウ科　キョウチクトウ、テイカカズラ

リンドウ科　リンドウ

モクセイ科	オウバイ、キンモクセイ	バラ科	ウメ、クサボケ、コウシンバラ、サンショウバラ、シモツケ、シャリンバイ、テイカノイバラ、ニワウメ、バラ、ボケ、ユキヤナギ、ノイバラ、フユイチゴ
エゴノキ科	エゴノキ		
サクラソウ科	オカトラノオ	ユキノシタ科	アワモリショウマ、ウツギ、ユキノシタ、ヤマブキショウマ
ヤブコウジ科	ヤブコウジ	アブラナ科	アラセイトウ、タネツケバナ、ミヤマトベラ
ツツジ科	ツツジ	ケシ科	ケシ、ケマンソウ
		ツバキ科	ツバキ、ヒメシャラ、サザンカ
◇双子葉植物　離弁花類		ドクダミ科	ドクダミ
ウリ科	ユウガオ	スイレン科	コウホネ
シュウカイドウ科	シュウカイドウ	アケビ科	アケビ、ムベ
ミソハギ科	サルスベリ	メギ科	ナンテン
フトモモ科	バンジロウ	キンポウゲ科	オオバショウマ、カザグルマ、シャクヤク、テッセン、ボタン、トリカブト
ザクロ科	ザクロ	マツブサ科	サネカズラ
スミレ科	スミレ	モクレン科	シキミ、タイサンボク、モクレン
ジンチョウゲ科	コガンピ	ヒユ科	ケイトウ、ハゲイトウ
アオイ科	タチアオイ、フヨウ、ブッソウゲ、ムクゲ	ナデシコ科	カワラナデシコ、コゴメナデシコ、ナデシコ、ミミナグサ、ムギセンノウ
ブドウ科	ツタ、ブドウ、ナツツタ	タデ科	ミゾソバ、サクラタデ
ミツバウツギ科	ミツバウツギ	セリ科	セリ
クロウメモドキ科	ナツメ	トウダイグサ科	トウダイグサ
ツリフネソウ科	ホウセンカ		
カエデ科	イロハモミジ		
ミカン科	サンショウ、ヘンルーダ		
フクロウソウ科	ゲンノショウコ		
マメ科	コマツナギ、ハギ、ハネミイヌエンジュ、フジ、ホドイモ、ミヤマトベラ、ルピナス		

◇単子葉植物

ラン科　カキラン、カンラン、キリシマエビネ、シロバナシラン、シュンラン、フウラン、セッコク

カンナ科　カンナ

ショウガ科　クマタケラン、ハナミョウガ

アヤメ科　アヤメ、シャガ、シロアヤメ、ヒオウギ

ミズアオイ科　コナギ、ミズアオイ

ヒガンバナ科　クンシラン、スイセン、ハマオモト

イネ科　ススキ、チカラシバ

ツユクサ科　ツユクサ、ヤブミョウガ

ユリ科　オモト、カノコユリ、ジャノヒゲ、テッポウユリ、ナルコユリ、ノギラン、ノシラン、ノヒメユリ、ハラン、ヒロハアマナ、ヤブラン、ヤマホトトギス、ムラサキオモト

オモダカ科　クワイ

◇裸子植物

マツ科　トウヒ

マキ科　ナギ

天井絵の植物について

花尾神社の拝殿、幣殿、祝詞殿の格天井には四〇一点の植物が描かれている。この天井絵については、平成三年（一九九一）に井手上三博撮影の写真によって、植物分類学者の初島佳彦が鑑定した。その後、平成一七年（二〇〇五）に大野照好・落合雪野・郡山繁幸によって実地に再調査された。その結果、種類によっては重複して何枚も描かれているものがあり、種数にして前記一六四点以外の約六〇点については鑑定できなかった。それは、これらの絵が植物の形態を写実的に描くのではなく、印象的に表現している点、色彩がぼやけて判別しにくい点、近接して見られない点などによる。

鑑定できた一六四点を種類別にみると、双子葉植物の合弁花類が四六種類、離弁花類が七九種類、単子葉植物が三七種類、裸子植物が二種類となる。

描かれた植物は庭園に植栽されている樹木類、草花類、集落の付近にある樹木や草本類、栽培されている野菜類や薬用植物など雑多で、必ずしも特別な意図を持って描かれたものとは理解されない。

樹木類はツバキ、ヒメシャラ、ハギ、ツツジ、キンモクセイ、モミジ、フヨウなど観賞価値の高い低木類や小高木類が多い。草花類はオモト、カノコユリ、テッポウユリ、シュンラン、フウラン、アヤメ、カザグルマなど人家に多く栽培されていて花の美しい園芸作物の種類が多い。野山の植物では、身近にあって人目をひくタンポポ、ヨメナ、ホトトギス、キキョウ、ススキ、リンドウ、スミレ、オドリコソウ、ヒルガオなど大衆的な種類が描かれている。ドクダミ、ゲンノショウコ、トリカブト、ケシなどの薬草や毒草、及びバンジロウ、ヘンルーダ、ブッソウゲ、テッセン、オウバイなどの外来種にも注目していて面白い。これらの外来種は、当時既に移入されていて、一般の人家でも栽培されていたことがわかる。

こうみてくると、この絵を描いた絵師、能勢一清が身の周りの身

近な植物をなるべく広く取り上げて描こうとしたのではないかと思われる。また、重複する植物については、空白の枠を埋めるために身近な素材を探して描いたためではなかろうか。

【参考文献】

郡山政雄『さつま日光―花尾神社』…私家版、平成三年

熊野神社の八王子社の一つ

第二章　郡山の寺社

第一節　神社

1　現存する神社

明治一七年（一八八四）頃に編纂された「鹿児島県地誌　下」（『鹿児島県史料集17』、以下「県地誌」）から郡山町域の神社数を拾うと、計二八社あり、その後「（明治四十一年十月ヨリ）神社財産登録申請書」（以下「神社登録」）では、一九にまでまとめられたが、さらに合祀・抹消され、現在は一四社（うち宗教法人登録数は一二社）を数えるのみである。本項では江戸時代後期の『三国名勝図会』（以下『三国』）と「県地誌」の記述も参考にして、現存する神社を概説する。なお、本章の地名は合併後新鹿児島市内の表記としている。

川田神社　川田町川田中

「県地誌」では、「無格社、村ノ中央ニアリ、社地七畝歩川田駿河守ヲ祭ル、例祭二月二十四日、創建年月詳ナラズ」とある。

神社の前身は、洞源山大川寺で、廃仏毀釈により本寺が廃された時、勝軍地蔵

勝軍地蔵三尊

の像をご神体として、寺跡に川田神社が建てられた。地蔵は川田氏一二代義朗（よしあき）の像で、甲冑を着け白馬に跨がり、右手に錫杖を持ち、左手に如意宝珠を持つ。左側に毘沙門天、右側に不動明王を置いた三尊の形になっている。

戦時中は武神として、出征して行く者やその家族の参拝が多かったという。神社の裏の敷地には、川田氏一一代義秀夫妻の墓から、二六代川田佐徳夫妻の墓石までが確認できる。

南方神社　川田町川田中

川田神社のすぐ裏手にある。かつては諏訪大明神、諏訪神社といい、『三国』（一五六〇）には、「諏訪大明神社川田村にあり。祭り七月二十六日、永禄六年の棟札あり」。また、「県地誌」には、「村社、村ノ北ニアリ。社地東西弐拾間、南北弐拾四間、面積壱反六畝六歩、積羽八重言代主神・建御名方富神ノ二神ヲ祭ル。例祭七月二十六日　社地中老樹及ビ老桜アリ。創建年月詳ナラズ。」とある。明治四二年（一九〇九）四月一六日には、住吉神社と大王神社との合祀が許可され、改築のため郡山村大字川田字諏訪原一〇〇五番地から、大字川田字太（た）ラヶ宇都一八六五番地へ移転、社地六畝拾六歩、本殿四坪、舞殿四坪となる。同年一二月一二日付で合祀、南方神社と改まった（「神社登録」）。

南方神社（川田下）

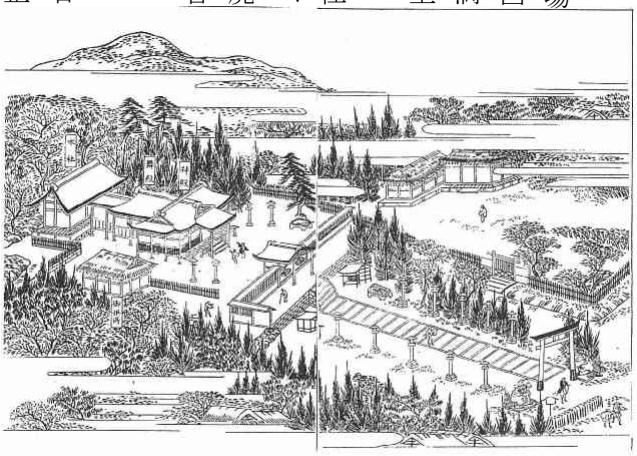
「木場家系代記」（一五六一）（木場家蔵）によると、「永禄四（ママ）乙未年村上飛騨守薩別満家院日置郡郡山川田之里江諏訪社再興棟札相見得」と書かれている。社殿の前には、石灯籠一基、石祠一基、鳥居前には廃仏毀釈により破損した首欠け仁王像一対がある。

一之宮神社　東俣町白石

『三国』は、祭神を正位に島津忠久（得仏）左位に丹後局、右位に惟宗廣言の三座とし、その他に、姓名の定まらない供奉随身が七二体もあったと記している。

創建年代は不詳だが、「花尾社伝記」（玉里文庫）によれば、文明四年（一四七二）島津立久の執政で郡山城を領していた村田経安が当社の再造を志したが成らず、延徳三年（一四九一）に至って社殿を落成させたという。

『三国』によると、社威は一時衰微したが、享保一一年（一七二六）島津継豊が再興、天明六年（一七八六）島津重豪が修造するな


「一之宮神社」（「三国名勝図会」）

ど、藩主の崇敬を呼ぶに至った。拝殿内には、重豪の讃（書画の脇に記す文）が入った扁額が掛かり、また境内には天明六年に奉納された狛犬一対の石像が残る。また翌七年には琉球使節の参詣があり、同年琉球から贈られた扁額が二枚ある（扁額献納の時代背景は第七編第七章を参照）。元文四年（一七三九）には東俣村民が唐金で作った御幣が奉納されている。

祭礼は二月三日・一一月三日であったが、現在は祈念祭が三月一日・六月灯が人月一日・例祭が一一月一日となっている。

本殿の中に、明治四三年（一九一〇）から昭和二六年（一九五一）にかけて、高尾神社ほか数社を合併合祀した厨子が納められている。

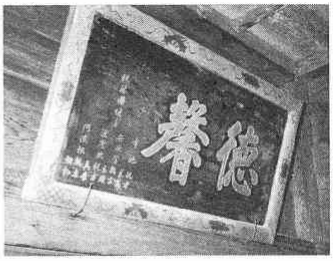
◇琉球使者からの扁額

「徳馨」額縁七宝繋ぎ文

献納　幸地親方良篤・安次富親方良頭・渡慶次親方真厚・阿波根親方朝紀

徳馨…高徳にして、よき感化が広まる

「永頼」額縁上下珠取双龍雲文



「永頼」　一之宮神社の扁額　「徳馨」

献納　今帰仁按司朝賞

永頼…永く頼りにする。

◇棟札

従四位上中将源朝臣重豪

表　薩州日置郡郡山郷一宮大明神寶殿舞殿拝殿及御供所造替

天明六年丙午四月吉日

裏に、舩奉行作事奉行松崎左衛門源貞衛外の城下士と郡山の郷士年寄肥後善兵衛平盛方他の名が書かれている。

このほか、明治二五年（一八九二）一月吉日の一之宮神社造替の棟札が一枚あった。

近都宮神社　油須木町油須木

『三国』（一六九二）に「近都宮東俣村油須木にあり、祭事二月五日・十一月五日、元禄五年・正徳四年（一七一四）等再興の棟札あり」と記されるが、これらの棟札は確認できなかった。また、「県地誌」には「村社、村ノ北ニアリ、社地東西拾間。南北拾間三尺、反別三畝拾六歩、島津忠季ヲ祭ル。例祭十一月五日創建年月詳ナラズ。」とある。

◇棟札

①　明治七歳戊八月吉祥日、近都宮神社奉上地造立御遷座氏講中勧修（一八七四）

近都宮神社（油須木）

也上申許可　薩州日置郡郡山油須木邑

この棟札の裏に、このとき工事に関係した油須木村の士族の戸主二八戸及び門の名頭と有力な家部の世帯主二四人の名が記されている。

②「昭和四年（一九二九）午三月吉祥日

近都宮神社奉改築御遷座上申許可　油須木氏子」

棟木の裏に当時の建設委員や大工等の名が記録されている。この改築は御大典記念事業として行われたことが、鳥居横の改築記念碑から理解できる。

社格：油須木村

御神体：唐金製御幣と山鉾　本殿内　大厨子一と小厨子二

菅原神社　郡山町麓

「県地誌」に、「無格社、村ノ南ニアリ、社地東西拾三間、南北六間面積七拾八坪、菅原道真ヲ祭ル。例祭二月二十五日、八月廿五日」とある。

御神体は高さ一尺余の木像。神殿は六坪の神明造りで、鳥居は石造りとある（「神社登録」）。

明治四四年（一九一一）八月六日、麓の秋葉神社を合祀、本殿内に厨子が二つ並び立つ。昭和五五年（一九八〇）の改築の際、拝殿正面の梅の紋様が描かれた右側の袖に、「慶安五年（一六五二）」と、「嘉永六年（一八五一）関造□□」の文字が見つかり、慶安五年が創建かと推測される。社地の東側に招魂碑群がある。

菅原神社（郡山麓）

潜木（くぐるぎ）神社　郡山町清和

『三国』によると、潜木神社の前身は諏訪大明神社で、「地頭館を隔ること西方凡四町、郡山村に在り、祭神二坐、本府宗廟方に同じ、祭祀七月廿六日なり。社内に寄進の絵馬あり、背銘に村田右衛門尉藤原経成（一五八七）、勧請再興、天正十五年丁亥七月初四日真木之山住権大僧都日誉と記す（略）是を郡山の総廟とす、祠官前田某」とある。

明治五年（一八七二）、諏訪神社は小山田町の諏訪神社に合祀されたが、明治七年八月に中福良の永田氏宅より氏神を勧請、新たに潜木神社を建立するに至った。同四四年（一九一一）七月一五日、常盤の秋葉神社石祠を移設、合祀する（「秋葉神社御遷宮式費帳」）。

◇棟札

①「明治七年戌十一月吉日

奉潜木神社拝殿造替　常盤方限中」

潜木神社（常盤）

②「昭和七年三月二日神社改築　五月十八日成就、二十二日落成式」
③「平成十六年六月竣工、七月十七日遷座式」
④「明治五年壬申載四月三日憲章（河野か）謹誌」によると
「慶安五年（一六五二）三月舎（社か）宇□営、元禄四年（一六九一）・正徳元年（一七一一）鳥居改正（ママ）、享保九（ママ）甲辰（一七二四）二月鳥居及び補営」等々沿革が記録されている。これを記した人物は、郡山郷初の郷校で教鞭を執り、西南戦争で戦死した河野憲章と思われる（第八編第十一章学校教育参照）。

鳥居　明神型　大正二年九月十七日建設　奉納者　竹内隆助
建設者　方限一統、石工　藤崎利左衛門・有馬泰蔵
石造り　下部八角柱・上部円柱
文政四年辛巳四月吉祥日奉献庚申供養塔　一基

稲荷神社　郡山町中福良

『三国』（一五三六）によると、「稲荷大明神廟　郡山村にあり、祭祀九月廿九日、天文五年の棟札を納む」とある。また、「県地誌」には「郷社村ノ北ニ在リ、社地東西拾五間南北弐拾間、面積三百坪、豊受姫命ヲ祭ル。例祭十一月三日、二月初午ノ日、社地老樹アリ。」と書かれている。「神社登録」で補足すると、本殿は神明造りの四坪、舞殿も神明造りの六坪、桁行弐間・梁間三間、御神体は鏡一面となっている。

稲荷神社は、比志島美濃守義住が、天文五年（一五三六）四月二一日、藤ケ山に創建したとあり、その後正徳五年（一七一五）二月吉日現在地に移し、大正五年（一九一六）に規模を広げた（『（旧）郷土史・上巻』）。現在は郡山郷旧六ケ村の公民館長が氏子総代として、祭礼に参加している。

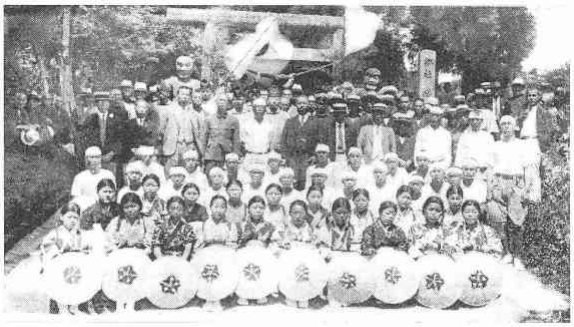
境内の両側に石祠があり、守護神となっている。また、近年鳥居前にあった田の神も境内に移設され、保存されている。鳥居前の仁王像は廃仏毀釈で倒されていたものを復元、その威容を誇っている。

かつてはお田植祭も盛大に行われ、早乙女・早男が一斉に並んだ手植えの様子は、戦前の「鹿児島新聞」（「南日本新聞」の前身）でも恒例の歳時記として紹介されていた。

山祇（やまずみ）神社　郡山町大浦

「県地誌」によると、「村ノ西ニアリ、社地東西二拾間、南北之ニ同ジ、面積四百坪、祭神詳ラカナラズ、例祭十一月中申ノ日、創建詳ラカナラズ」とある。「神社登録」には、舞殿と本殿を一棟とし、桁行弐間・梁間五間、神明造りの十坪とある。

大浦集落の中心地にあり、主神は大山祇命（おおやまずみのみこと）というが、それを証明するものはない。近くの霊苑内に室町・


稲荷神社の早乙女・早男（『将兵慰問写真帖』）

山祇神社（大浦）

江戸期の五輪や石塔が多く、神社の神主のものといわれている。石造物に手水鉢や灯籠があり、手水鉢には庚申供養の寄進と銘記されている。本殿内に狛犬一対と中央厨子が一基ある。

なお、「県地誌」や「神社登録」には、西俣村平原や厚地村川平にもかつて山祇神社があったことを伝えている。

霧島神社　西俣町西俣中

「県地誌」によると、「村社、村ノ中央ニアリ、社地東西八間・南北二拾間、反別七畝二拾五歩、祭神ハ瓊々杵尊・彦火火出見命・玉依姫命・木花開弥姫命・葺不合命・神功皇后ヲ祭ル、例祭九月十九日・二月二日、社地老樹アリ」とある。

勧請年月日不詳、明治四四年七月一一日三神社合祀祭、山祇神社と素盞嗚（すさのお）神社を合祀し、境内に天師神社の石祠を置く。天師神社の石祠に「明治四年未三月吉日西俣村中・下相中」とあり、社司永尾杢外名主や大宮司、石切等の名が刻まれているが、明治後期の「神社登録」には辺保木助次郎名もあり、当時は西俣上も氏子だったのだろう。

境内には石灯籠一基、手水鉢一基（宝暦四年（一七五四）一一月奉寄進）石祠一基、馬頭観音一基（平成一五年移設）

神殿の中に陶製の狛犬二対が保存されていて、その一対は片方がかなり破損している。

◇狛犬の銘

「寛文八歳申八月吉日

□文神記誌（きし）ん奉る　伊集院之内　美山作元苗代川之仁官」

寛文八年（一六六八）苗代川の陶工仁官が製作、寄進したか、もしくは寄進者が別人だろうか。

神殿内にご神体の厨子が三基あり、小型の厨子一基には中に鏡、大型の厨子二基には、中に鳥居一、鉄棒一、剣一がある。他の一基には金属製の御幣らしきものあり。他に自然石十数個が確認された。

霧島神社奉納狛犬

熊野神社　郡山岳町本岳

「伊集院由緒記」によると、熊野神社について

「嶽村神之園

一　熊野三社権現　格護人　嶽門庄右衛門

若宮大明神

祭り二月二日、九月二十五日、十一月二日

熊野三社権現正体　唐金差渡六寸

若宮大明神　　木座像高さ一尺二寸程

鰐口　銘　貞享五年（一六八七）七月吉日　小倉峯助重興」

かつては嶽村鹿倉のうちにある上宮岳の頂に祭ってあったが、後に現在地に遷したという。「由緒記」に記された天明の頃には、この神社を嶽門が管理しており、庄右衛門は当時の名頭である。

熊野神社のご神体は鏡で、若宮神社は木座像である。このほかに

棟札八枚を確認できる。享保一四年（一七二九）巳酉歳三月吉日付の「奉宮殿修理細色」、天明三年（一七八三）の「宝殿二宇造栄」、文化元年（一八〇四）と同一四年の棟札、天保一五年（一八三四）の宝殿造営、嘉永六年（一八五三）、慶応四年（一八六八）の棟札等である。そして、大正一三年（一九二四）と平成一一年の改築で現在に至っている。また、明和年間（一七六四～七一）の手水鉢も残されている。

棟札（熊野神社）

神社の近くには阿弥陀堂や観音堂など寺跡もあり、嶽地区の人々の信仰の中心地となっている。

なお、『三国』によると、「熊野三所権現往古当郷上宮嶽の絶頂に鎮座す。神威猛烈とて十三歳以上の女子は廟門内に入ることを得ず」とある。

智賀尾神社　郡山岳町里岳（写真は第五編古代参照）

『三国』によると、「智賀尾六所権現社　嶽村にあり、奉祀陽神六座陰神六座都（すべ）て十二座にして、神名及び勧請年歴詳ならず・むかし同村餅川上の岡に鎮座して、大社なりしに、野火延びて社殿焼亡す、その後今の地に遷す」とあるが、『日本三代実録』には「貞観二年（八六〇）三月廿日庚午、薩摩国従五位下智賀尾授従五位上」と叙位の記録があるので、それより以前には創建されたことになる。

神社は神殿と拝殿からなり、向拝には蟇股や虹梁があり、荘厳な神域を持ち、薩摩では屈指の由緒深い神社として地域の人々の信仰は勿論、時の藩主や地頭からも手厚い保護を受け、さらに明治になって早くも明治四年（一八七一）八月県社に列せられ、以来大祭には県知事の奉幣を受け、昭和一〇年（一九三五）秋昭和天皇鹿児島行幸の際は、神饌幣帛料を供進されたりと威を保ったが、現在はその数々の棟札や宝物もなくなり、地域住民でいくつかの祭事が行われるようになっている。なお、境内には日露戦役紀念碑（明治三九年設置）があり、従軍者二一名の名が刻まれている。

この社を中心として、東市来の田代、樋脇町の市比野、入来町の池頭・久木宇都・山下・黒武者・毎床と八社が八重山を中心に建てられ、智賀尾八社権現として崇められている。

「嶽村前田

一　智賀尾六所権現　一社　格護人　内門　弥右衛門

祭リ　九月十九日

正体　木立像拾弐体　四体壱尺弐寸程、

八体九寸五分程

苗代川御仮屋より寅卯之方道法凡三里五町

一右棟札之内源朝臣光久公御息災延命御子孫繁昌身心堅固武運長久当地頭島津甲斐守、応永三十年癸卯（一四二三）天九月廿日と有之候

一又棟札之内大檀那藤原朝臣　貴久公御息災延命子孫繁栄身心堅固武運安全弓矢勝利降敵退散当地頭右衛門太夫孝久、天文廿二（一五五三）年癸丑二月廿四日

一普門品　一巻
縦板白木箱緒絹真田
右　斉興公御寄付文政四巳三月廿六日寺社奉行所相添状有
一額
智賀尾六所権現
文字唐金之切はしニて板ニ打付
裏ニ
平山與三左衛門尉武紹・柏木源左衛門尉道重・同孫六道弘　永
正十六年戊卯二月廿一日大願主敬白大宮司次郎左衛門尉・同八
郎左衛門尉・木場次郎左衛門尉安重卜有之」
（「伊集院由緒記」）

南方神社　有屋田町有屋田

諏訪大社の末社として、有屋田のほぼ中央部、小字川添・諏訪脇にある。

「有屋田村　川添
一　諏訪上下大明神　一社　格護人　宮田門　喜助
祭り　七月二十二日　北門　善左衛門
正体　勧請御幣
杉木ニ而四方角
苗代川　御仮屋より寅卯凡弐里半拾壱町三拾間
右棟札之内　大檀那源継豊公御息災延命子孫繁栄身心堅固武運
安全弓箭勝利降敵退散当地頭島津弥一郎、寛保三癸亥暦二月晦
日と有之候」
（「伊集院由緒記」）

この南方神社は「県地誌」に「村社、社地ハ東西凡ソ八間、南北凡ソ二十間トアリ、御祭神ハ建御名方命八坂刀売命ノ夫婦ノ二神ヲ祀ル。例祭九月二十一日　社地老樹アリ」とあるが、現在はこの老杉はなくなり、御柱信仰としての歴史は偲べない。

神社の拝殿の横には、元禄一一年（一六九八）一〇月吉日建立の庚申供養塔二基が寄進されている。諏訪神社は稲荷神社と並んで島津氏が特に尊崇した神社であって、島津氏の一族である伊集院氏が領した有屋田に勧請して建立したのではなかろうか。神社の近くに有屋田城跡や町指定の庚申供養三層塔もある。

南方神社（有屋田）

山の神神社　郡山町東雪元嶽キミ子宅裏山の孟宗竹林の中

屋根は瓦葺き。畳三畳程の社で、その中の中央に厨子があり、神鉾や御幣が飾られている。厨子の前には、浜砂が盛られた貝の皿が十数個奉納してある。東市来の江口浜などの砂を若者達がとってきて奉納したものという。

◇棟札
①「明和五歳

奉寄進　山神獅子駒　嶽　十兵衛
十月吉日

両面上部に三つの梵字が書かれている。

②本社殿は文久三年（一八六三）新築の後、凡そ百年の昭和三十六年（一九五一）二月二十日、更に神殿改築し、其の後神殿の腐朽甚だしく、嶽義則の発議により氏子総意により、部落有志の賛助加担によって、昭和五十年（一九七五）九月廿八日、新築更新し、住民福祉と社の隆盛発展を祈念する

昭和五十年九月二十八日

③文久三年（一八六三）新築後、凡ソ百年（昭和三十六年二月二十日）老朽セシ神殿ノ之改築ノ儀ヲ諮リ、吉辰ヲ定メ、工匠大迫武夫竝、嶽近行匠師トナリテ、六十歳ノ老躯ヲ押シ、励精貢セリ。梅花馥郁トシテ薫ル。氏子総員ガ協力シタリ

昔は、集落民で祭礼を行い、本座の係は江口浜や吹上や市来の海岸に出掛け、渚の砂を持ち帰り、その砂を貝皿に盛って神前に捧げるとともに、各戸にも配っていた（浜下り）。現在は嶽の嶽キミ子宅だけで守っている。

山神神社　奉納砂

2　合祀された神社

1の冒頭で述べたように、文献に表れるだけで明治初期には郡山に二八の神社が存在していたが、人々の記憶にある神社を入れるとそれ以上の数になる。郡山の神社の合祀について語る資料は少ないものの、前出の「（明治四十一年十月ヨリ）神社財産登録申請書」（以下「神社登録」）で、明治時代末期の合祀の状況は見てとれる。

ここでは、「県地誌」に記載された神社を列記する。すべて無格社である。

◇川田村

大王神社　字黒瀬戸六四番地（「神社登録」）

住吉神社　字森山一八八八番地（「神社登録」）

どちらも明治四二年（一九〇九）一二月一二日に川田村の南方神社に合祀されている。

◇東俣村

妙見神社　村の東にあり　盛田・有川・福田家所有の山頂（『（旧）郷土史』）

高尾神社　字高尾三七四九・三七五〇番（「神社登録」）

湯屋神社　字小原三〇〇五・三〇〇六番（「神社登録」）

南方神社　字樋渡二九七四番地（「神社登録」）

鎮守神社　字永山三三八〇番地（「神社登録」）

天ノ御中主神　字柿木迫四二三八番地（「神社登録」）

湯屋・南方・鎮守・天ノ御中主神は明治四三年五月二二日に高尾神社へ合祀されている。その高尾も昭和二七年（一九五二）には一之宮神社に合祀された（『（旧）郷土史』上）。

◇厚地村

山祇神社　字川平二二二〇番地（「神社登録」）
妙見社　村の中央にあり
霧島神社　村の東にあり
秋葉神社　村の南にあり
王子神社　村の南にあり

山祇以外は「神社登録」に記載されていないので、明治四一年当時、既に合祀されていると思われる。秋葉神社は石祠のみ。山祇神社は、現在神殿はなく、石殿に山祇神社の彫りがあり、近くの加藤家によって祭事が行われている。

◇西俣村

素盞神社（すさのお）　村の北にあり
山祇神社　字平原一九九五番（「神社登録」）

素盞は「神社登録」には表れない。山祇も今はその姿をとどめていない。

第二節　寺院

1　現在の寺院

浄土真宗本願寺派天龍山光明寺　郡山町六五〇九

本尊は、阿弥陀如来。藩政以来真宗寺院は設置できず、明治九年（一八七六）の開教以来鹿児島別院の直門徒として、巡回布教のときに聞法するだけに過ぎず、村内の有志がこれを遺憾として、大正一〇年（一九二一）の初頭より再三集合して出張所開始を図ったがなかなか解決しなかった。しかるに、賦合・馬場・上園・柿木平・常盤・西俣の門信徒が相談のうえ、麓の河野宅を借用し、これを仮説教所として別院に布教使派遣を要請したところ、別院承仕上田月照が初代主任として着任し、以前にも増して繁栄するに至った。

大正一二年二月、麓の中村家の敷地が寄進されると、説教寺設立の念願が熟した。鹿児島市谷山町（当時）の妙行寺本堂改築による旧本堂の売却を耳にし、同年二月二日谷山へ視察して交渉をまとめた。六ヶ月有余の日数を費やし、一〇月九日落成するに至った。

大正一三年二月、別院に独立許可願書を提出、同月一八日ここに郡山説教所として開所、同時に本川順章が赴任する。同一五年一一月本尊を迎え、宮殿須弥壇を購入。昭和七年（一九三二）岩崎深信赴任、同一六年宗教団体法が施行されると、当寺の輪番中神文雄師を主管者に教会として認可される。同年五月森山隆男師赴任、昭和一九年一月大内馨隆着任。

戦後、二二年四月発令の宗教法人法では、教会は一ヶ年内に寺院に切り替え手続きをするようにとの定めで、当教会協議の結果、翌

光明寺（郡山麓）

年三月切り替えの手続きと同時に、大内に住職として留まるよう懇願、同月承諾される。寺号は大内が福岡県甘木市光照寺出身なので、光の字を一字とり光明寺となし、昭和二四年（一九四九）一月二七日寺号公称及び住職の訓令を落手し、光明寺初代住職となる。以後、仏教婦人会・日曜学校・仏教青年会を発足させ、住職在職八年余の昭和三二年六月三〇日に入滅。以来、二代住職が相続するまで前坊守が代行し、昭和四二年（一九六八）大内信隆が二代目住職として入山する。

平成六年（一九九四）四月一六日の二代目住職の急逝により、妻の大内章子が三代目住職として継承。同八年一〇月二八日に光明寺本堂・庫裡等四二四㎡を焼失する。同年一二月、肥後盛雄所有の近隣地を無償で借用し、プレハブ仮本堂を仮説教所とした。

平成一一年末に門信徒切望の本堂・庫裡が完成、翌年に内陣が整い現在に至る。平成一三年一一月一〇日第三世住職継職報告・本堂新築落成慶讃記念大法要を営む。

浄土真宗鹿児島別院　東俣出張所　東俣町三七六一

この東俣出張所の歴史は比較的新しく、昭和二一年（一九四六）七月三日を当所創立の記念日とする。東俣を流れる川田川を挟んで左岸側を東部、右岸側を西部と呼ぶが、出張所の設立以前は、東西それぞれの講間（相続講）を維持し、別々に各地の講間と法儀相続の道を歩いていた。時々別院の方から講間布教の出張があったが、出張所設立の呼びかけに、地元の信者も気運が高まり、東部に昭和初期からあった稚蚕飼育所をそのまま本堂に利用し、西部の講間からは本尊を供え、初代主任の農坂勝真師が赴任、総代に福元伊助が選ばれて、東俣出張所として出発した。

昭和二三年二月には、懇志一〇万二七六〇円で庫裡を建築、それまでは本堂内に仮住まいであった。さらに翌年内陣を増築整備、新しい本尊を松山心光寺より迎えたのが二六年二月九日のことで、購入代金三五〇〇円、修理費一八〇〇円、購入旅費七七四七円と記録されている。

東俣出張所（東俣）

昭和四七年（一九七二）九月三〇日、老朽化した元煙草収納所に代わる新本堂建設が、役員会の満場一致で決議され、その第一歩として管内一八地区で説明会を開き、広く賛同と協力を得られた。

最初の計画は、鉄筋一〇〇〇万円の目標で、六〇〇戸の門徒から毎月五〇〇円ずつ三年間進納してもらう予定でいたが、石油ショック以後の物価高騰により、設計見積もりが二六〇〇万円と跳ね上がり、建設の見送りにまで追い詰められていった。そうした中にも門徒より急ぎ建設の声が上がり、再度役員会を開いて、木造建築に切り替えることで計画を練り直した。各地区や仏教婦人会による一九名の建設委員を選び、片平建設により四九年七月に着工。同年一一

月に完工したが、本堂・茶所・水洗便所を含めて、募金目標額を遥かに上回る総工費一八六〇万円を要した。これには農協より七〇〇万円の融資を予定していたが、次々と特別懇志が寄せられて、その懸念も解消された。

主任は農坂勝真より三坂信暁・米永春香・管原哲哉・出雲慈円・和田勇哲・田口唯教・藤野義定・蒲生地庄三・野崎流見を経て、現在の水内大澄に至り、総代は福元伊助・鶴村勇一・渕脇為吉を経て、山田義雄に至り、それぞれ相携えて法灯を伝承している。

ここではまた、幼児教育の重要性を踏まえ、昭和三一年（一九五六）三月別院の旧事務所を移転改装して幼稚園を創設、同五九年一月には鉄筋二階建の園舎（総工費七八五〇万円）が完成し、幼児教育の一翼を担っている（第八編学校教育参照）。

当地もまた有数の念仏禁制受難の歴史を持ち、特に花尾宮脇の隠れ念仏洞に全国各地からの参拝者も訪ねているという。東俣二地域に始まったこの出張所も、今ではすべての地域の講間が出張所一つに結集し協力し合っている。そして各地区の仏教の年中行事の数々が厳然として実施され、仏教婦人会は毎月各地区交替で、本堂清掃の活動を続けている。

このほか鹿児島別院本名出張所で、講間に郡山町の油須木・岩戸・大平・久保山組が組織の傘下にあり、毎月一回一泊二日の寄り合いがあり、会所を交替したりしていた。

天台宗大雄山　南泉院

花尾町三八四一

鹿児島市の北西部のこの地に、平成七年（一九九五）、宗祖伝教大師の「忘己利他」の遺教を流布すべく再建された寺院である。この寺院は、標高四九五㍍、寺領八〇〇〇坪で、途中の馬渡峠からは遥かに開聞岳や金峰山を眺望し、近くには花尾神社や、一向宗禁制を偲ぶ隠れ念仏洞がある。春は桜に秋は紅葉の映える境内には、甲突川東の水源とも言うべき龍神池があり、大雄山の緑の木立の中には仏舎利塔がそびえている。

南泉院の行事として、毎月観音・地蔵・不動の各縁日の外、多くの祭事が行われる。寺内には、十一面観音菩薩や大日如来・不動明王・日蓮髭曼陀羅などがあり、敬虔な信者たちが参詣している。現住職は宮下亮善。（「天台宗大雄山南泉院略縁起」）

南泉院（大平）

2　古寺

本項では、廃仏毀釈の時に毀された古寺を江戸時代後期に記され

た『三国名勝図会』より拾い出し、それに補説した。

真木山寺光院　法幢寺

郡山麓の寺下にあり、本府（鹿児島）真言宗大乗院の末寺であった。本尊は地蔵菩薩で、開山は伊集院の猪鹿倉荘厳寺八代住職の賢雄法印。賢雄は島津貴久公に厚く信ぜられた名僧で、鹿児島の真言宗大乗院を建てた人である。元和七年（一六二一）正月元日、火災に遭い古い記録を失ったため、来由を伝えられないという。次の円照寺とも近く、これらの立地から付近に「寺下」という地名が付けられたと思われる。

法幢寺跡（郡山麓）

西光山　円照寺

郡山麓の寺下にあり、市来の曹洞宗龍雲寺の末寺で、阿弥陀如来を本尊としていた。開山は大通徳光禅師である。

また、徳光は俗姓川田氏で、川田第七代飛騨守立昌の弟、龍室良従和尚という龍雲寺三世の住持とされる。後に福昌寺一〇世に住し、文亀三年（一五〇三）癸未退院し、再び龍雲寺に住し、永正一〇年（一五一三）癸酉一二月五日、年七一歳にして化す（亡くなる）と、福昌寺所蔵寺院由緒帳、市来龍雲寺の伝えにある。

現在、五世聖厳存郭和尚、元禄二年（一六八九）己巳九月八日銘の無縫塔（卵塔）と、倒壊埋没していた八基の無縫塔と、三基の角石塔が確認できている。

廃仏毀釈で壊された後、喜界島から出て来た山口（後、河野）憲章がそこに塾を建て子弟の教育に当たったが、それは郡山郷校外城第七四郷校の前身となった。

円照寺跡（住職墓）

洞源山　大川寺

川田にあり、曹洞宗市来龍雲寺の末寺であった。川田氏四代掃部助義立がこれを開基した。本尊は釈迦如来、別に川田氏一二代駿河守義朗の像を勝軍地蔵として祀っていた（第一節川田神社参照）。

開山は龍室良従和尚（前記円照寺参照）当寺は初め大川院と言われていたのを後に大川寺の寺号に改められたという。

廃仏毀釈後は、勝軍地蔵をご神体として川田神社を建立、現在に至っている。

平等王院

地頭館より丑（北北東）の方一里余（約五キロメートル）、東俣村厚地にある。得仏公（島津忠久）が創建した花尾大権現別当の本坊とする

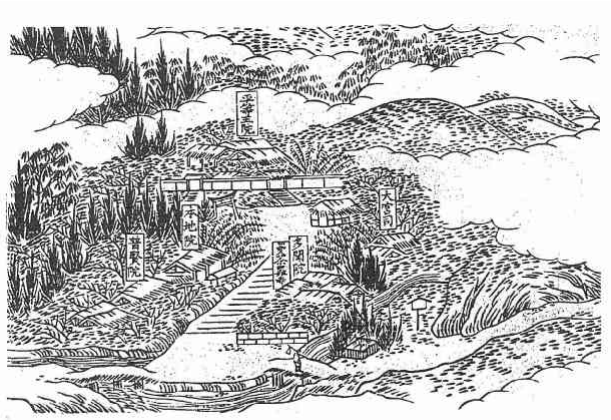
（創建の経緯については、本編第一章を参照のこと）。花尾大権現廟より辰巳（東南）の方、凡四町（約四四〇㍍）、廟道の左傍にある（現在の社務所辺りか）。鹿児島の真言宗大乗院が兼帯する。本尊は愛染明王（弘法大師作の座像、第一章に詳しい）、その他大信公（島津重豪）の安置する聖観音の像一体がある。世に云う髻観音で、鎌倉右大将公（源頼朝）が常に髻の中に納めて信仰していたものを模して、新たに鋳させたものである。開山を永金阿闍梨という。

かつて支坊を多く抱えていたが、廃仏毀釈により、仏具その他ほとんどを大乗院へ引き上げたという。

◇平等王院の支坊

① 曼陀羅寺（円融院）

平等王院には曼陀羅寺・普賢院・本地院・多聞院の支坊があり、本坊の前の道路左右に置かれていた。曼陀羅寺の本尊は不動明王で、運慶作の立像長一尺二寸八分（約三九㌢）。初め円融院と称していたが、六四代天皇の諡号に触れるため、再興以後は、曼陀羅寺と改めたという。



曼陀羅寺　三国名勝図絵より

前記四坊の他にも大乗院の旧記には、安上院・中道院・吉祥院・菩提院・花蔵院・宗智坊・竪義坊・神坊・西坊などの名がある。右の他にも、厚地村にある慈光（寺光）門・松下門・田中門・谷口門・東座主・西座主などという所は、昔の三六坊の跡だという。寺領として、佐多浦村宮之原屋敷二〇石を領した。

② 普賢院

本尊は普賢菩薩の座像で、郡山郷福富門二〇石領知。

③ 本地院

郡山郷小原門の二〇石支配。本尊は、阿弥陀如来の立像、恵信作。長一尺三寸八分（約四二㌢）。

④ 多聞院

本尊は多聞天の立像。郡山郷久保田門二〇石領知。

東光山 珊隆寺（源舜庵）

源舜庵は、本府（鹿児島）曹洞宗南林寺の支坊で、開山は本寺三世南笑林芳和尚。初め郡山郷東俣村にあって東光山珊隆寺と称した。本尊は観世音菩薩という。

寛永五年（一六二八）、慈眼公（島津家久）が南林寺の南二町（約二二〇㍍）辺りに移し、執政比志島紀伊守国貞の菩提寺とし、寺号を源舜庵に改めた。元和六年（一六二〇）に亡くなった国貞の法名「堯庵源舜居士」に因むという。

今現在、珊隆寺の跡と思われる西上の孟宗竹林を訪ねると、僧侶の墓石など数基の石塔があって、近くの吉村勝志が自主的に管理している。

光明真言供養塔

本府真言宗大乗院鎮守花尾社の後　大乗院鎮守花尾大権現

明和元年（一七六四）大信公（島津重豪）が建立、四面に石欄を巡らしたもの。現在は確認できず。

珊隆寺跡（西上）

【参考・引用文献】
「鹿児島県地誌　下」：『鹿児島県史料集17』鹿児島県立図書館
「神社財産登録申請書」：日置郡郡山村役場編
『三国名勝図会』（全五巻）：五代秀堯・橋口兼柄編　青潮社　昭和五七年発行
「明治四四年七月一五日　秋葉神社御遷宮式費帳」：潜木神社氏子代表所蔵
「伊集院由緒記」：塩満郁夫編『鹿児島県史料拾遺XV』鹿児島県史料拾遺刊行会　昭和四九年発行

第三章　史的石造物

本章では、史跡・文化財案内も兼ねて、所在地を平成一六年の鹿児島市合併後の町名・地名で表記した。

第一節　墓・墓石塔群

1　歴史的人物の墓

この項では、郡山に眠る歴史上の人物の墓を紹介するが、東俣の東門百左衛門夫妻の墓については、第七編第五章に記載した。また、近世初期の地頭平田光宗の墓は、郡山の円秀（松）寺（円照寺か）に葬られた記録があるが（『本藩人物誌』他）、現在確認されていない。

西山宗知師の墓（東俣町永山）

東俣の永山入り口バス停からのぼって数分、永山公民館のそばにその墓は建立されている。

江戸時代の文化年間（一八〇四～一七）に、真宗では法儀惑乱の廉（かど）で宗知を始め多くの僧侶が追放などの憂き目にあった。墓の碑文にそれを見ると

文化ノ法儀惑乱ハ遂ニ幕吏ノ裁ク所トナリ故ナク正義ニ与（くみ）スル

僧俗多クヲ罪ヲ以テ処ス。師亦其ノ一ニシテ脱衣軽追放ノ身トナル　文化十一年九州ニ入リ　肥後ヲ経テ薩摩ニ来リ永吉ニ隠居ス　而シテ各郷ニ游化シテ法澤一明ヲ濕スニ至ル悲哉　天保七年十月十二日化禄ツキテ眠ルガ如ク往生ス　無数ノ信徒別レヲ惜シミテ号泣セザルワナカリキ　永山ノ講頭坂元仲次郎永ク恩ヲ忘レザランガタメ　其ノ分骨ヲ携ヘテ還リ　之ヲ浄地ヲ撰ミ葬ル　即チ此所ナリ　流レヲ汲ム徒ラ絶ヘズ　歩ミ運ビ徳ヲ仰ヒテ　益々信ヲ深クス　此ニ同信ノ有志相謀リテ塔ヲ建テ記念トス

云爾　橘　大安

とある。

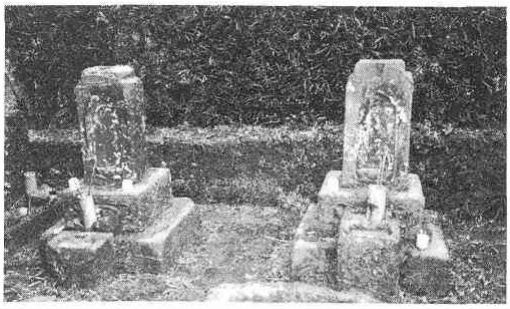
西山院大魯和尚は、文化三年「三業惑乱事件」連座により、幕府から罪科「重追放申付処牢屋敷類焼の解放ち遣わし立ち返るに付脱衣軽追放」を申し渡された（『本願寺鹿児島開教百年史』開教百年史編纂委員会）。大魯はかつて住職を勤めていた泉州境の慈光寺に帰り、後四国を経て、生まれ故郷の筑前久留米に帰り、さらに熊本から天草に渡り、専心布教に努めている。その後一向宗禁制の島津藩に天保元年（一八三〇）潜入、鹿児島・永吉（吹上町北部）に居を構え、布教に努め、細布講や煙草講といった秘密の教団を組織して、多数の信者を増やし尊崇されていた。そして天保七年（一九三六）一〇月一二日永吉村上草田土ノ窪の洞穴の中で六八歳の苦難の生涯を閉じた（『吹上郷土史　通史編二』）。後に、永山の講頭坂元仲次郎がその分骨を永山に納め信者の拠り所とし、昭和四年一〇月、同地に橘大安他講頭二二名が石工坂元喜代二に依頼し墓石を建立した。

西山宗知の墓（永山）

後醍院宗重夫妻の墓（郡山町坪久田）

後醍院は源姓で、後醍醐天皇の子征西将軍懐良親王（かねなが）の末孫といわれ、後醍院家略系によると、宗重は九代目にあたる。父は備後守良任、良任は大永四年（一五二四）八代に生まれ、慶長二年（一五九七）三月に長子宗重と薩州入来院に移り、市比野村の内、武田門や砂田門等を合わせて、一九門を所領、高五百石となった。

宗重は淡路入道淡斉と号し、天文二〇年（一五五一）に八代に生まれ八代の領主相良義陽に属し、一時高橋


後醍院宗重（右）と妻の墓（坪久田）

姓を名乗ったが、後にまた後醍院に復した。

天正一〇年（一五八二）一七代島津義弘が八代に在城した時、臣下となり忠節を尽くした。天正一二年の龍造寺隆信との戦には、後の郡山郷の地頭平田光宗の配下となって従軍し、戦功を立てた。その後宗重は朝鮮の役にも従軍している。

慶長五年（一六〇〇）九月一五日の関ケ原の戦いには島津義弘の配下につき従軍、敵に囲まれた義弘が戦死を覚悟した時、木脇休作とともにそれを諫止（かんし）し、敵中突破を献策して、隊の殿（しんがり）を務め義弘の身辺を護り生還帰国を達成せしめた勇者である。この戦功によって宗重は、さらに五〇石を加増され、常盤の地を与えられた。常盤村字坪久田である。宗重夫妻はこの地が大変気に入り、宗重は七四歳で亡くなるまでここに住み続けた。宗重は寛永元年（一六二四）四月六日逝去、法名香雲淳道庵主。妻は法名月光妙心大姉。墓前の供養塔は、宗重の死後一五三年を経た、安永六年（一七七七）宗重の子孫、後醍院良顕が建てたものである。宗重の父良任の墓は、薩摩郡樋脇町和田にある。

2　墓石塔群

川田氏累代の墓石塔群（川田町川田中）

川田神社の左奥に、大川寺時代の墓地があり、軍師として活躍した第一二代川田駿河守義朗の墓を始め、一一代義秀以降の累代及び大川寺代々住職の墓石塔群がある。これらの墓石塔群（五輪塔・宝篋印塔等）に刻まれた文字は、六朝時代の高貞碑や比魏の造像記の書風に似て、隋・唐の正しい楷書の品格を持ち、価値ある文化財であると云われている。

川田氏の墓石塔の相輪下部の請花文様に横帯を以て遮断した下部に初代文様をいろいろ違えて、川田氏であることを表している。一般には創始者の文様は、二代目以降には使用していないので、川田氏のものは珍しい。

なお、駿河守義朗は垂水の地頭で亡くなったので、ここの墓は供養墓ではないかと思われる。義朗の死後約四〇年の万治二年（一六五九）に、時の大川寺住職「天安禅師」が寄進した石灯籠が墓前に建てられている。

ここの墓石塔群の中には、宝篋印塔・五輪塔・無縫塔・角石塔婆が数多くあり、二六代川田佐徳と妻須賀子の墓石まで確認出来る。また、多くの献灯群もあり壮観である。法師墓は一一基ある。

地蔵墓は座像・立像とあり、傳室常心上座・その妻常永善

川田氏累代墓石塔群（川田中）

定門妙円禅定門などの彫りがある。

川田堂園供養塔群（川田町川田上）県指定　昭和三八年六月一七日

中世の頃、日置郡郡山町は満家院と呼ばれ、島津荘の寄郡となり建久九年（一一九八）島津（惟宗）忠久が地頭に任ぜられた。この満家院を中心に活躍した豪族が比志島氏で、川田は比志島盛資が領し、川田氏の始祖となった。

この川田堂園供養塔群には、壮大な層塔高さ三・四二メートルにも及ぶ塔数一〇基がある。この石塔群中最も注目すべきは、永仁五年（一二九七）の刻文のある角石塔で、縦一二〇センチ、横三三センチあり、上部には欠損しているが梵字が刻まれている。

「光明遍照　常以此功徳　十方世界　平等施一切　念仏衆生同発菩提心　摂取不捨　往生安楽国」「□霊　決定生極楽　蓮台成正覚□提　行常不退転　□道　三有及法界」

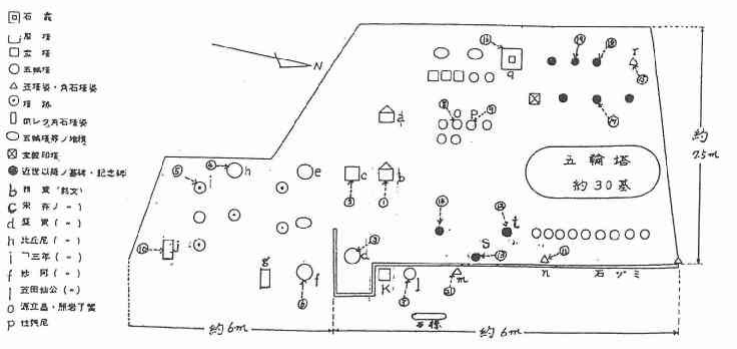
の経文（誓願文）と、

「右造立志者　為僧栄尊□　生霊□　極楽□　生死□　法界衆生□　永仁五年□」「右志者　為栄尊菩提也　永仁五年」

の発願文が刻まれている。この供養塔群が、川田氏祖「盛資」が父「栄尊」や祖父の「頼重」の菩提を弔って建立したものであることがわかる。

また、盛資の弟で西俣の城主「栄慶」の名も見える事から、栄慶も造立に関係していることが解る。石塔に刻まれた「頼重・栄存・盛資」は後世にそれぞれ比定して刻んだものであろう。

このほか、川田氏四代の「義立」七代の「立昌」「比丘尼」「妙阿」の刻字も見られる。川田氏十一代義秀からは川田氏累代の墓石塔群の中にある。



郡山町川田堂薗供養塔群配置概略図
（日置郡郡山町川田字井手上1238番地　比志島ミシュ所有墓地）

花尾神社墓石塔群（花尾町花尾）

花尾神社本殿より南へ二〇〇メートルの参道上に、百数十基に及ぶ石塔群がある。丹後局の墓は多宝塔で、笠石文様に彫られた⊕印・神号「丹瓊御統姫命（あかにみつまるのひめのみこと）」や「安貞元年丁亥十二月十二日」（一二二七）の刻字があり、よく整った石塔である。この多宝塔の右には「御苔石」と言われ、昔から安産の神様として石に生えた苔を削り取る石塔があるが、これが元の丹後局の墓石ではないか

とも言われている。

中央奥の石欄の中には、僧永金（ようきん）の墓の五輪塔がある。永金は平等王院と脇坊三十六坊の開山をした俗姓大蔵氏の出で、丹後局帰依の名徳で、ここに同じく祀られている。

永金の墓の右前には、宝篋印塔（ほうきょういんとう）があり、永徳四年（一三八四）甲子卯月二十五日「当山座主大禅師影相（追）逮善」の文字や、塔身台石の左右には二重彫りした、五字真言の梵字も見られる。

現在の形は、相輪の上部の宝珠がなくなっている。隅飾りの一部や笠部その他に破損や彫刻の摩滅している部分があるが、原型はほぼ残されている。笠部の屋根は、上下九つの段をつけ、隅飾りは大きく、蓮弁の彫りも立派である。屋根は左右にやや反り上がっており、その下は垂木が二重に彫刻されている。現在の高さは、約一二七㌢、下部の台は幅四二㌢、塔身（高さ二七㌢、幅二五㌢）の下にある請座の台の上には、蓮弁が彫刻してある。塔身や台石に刻まれた梵字は歴史的にも芸術的にも優れたものであるといわれている。

月輪塔（がちりんとう）は宝篋印塔の後ろ山手側にあり、「元徳元年（一三二九）八月吉日　快口逆修」の銘がある。鎌倉時代のもので珍しいと言われている。構造は上部卵形・請花・竿・基礎部からなり、卵形の月輪に五点具足の退蔵大日如来の種子「アーンク」が彫られている。月輪の厚さ一〇㌢、全高八〇㌢。

月輪塔の梵字「アーンク」

月輪は完全に円形の月の意味で、仏の知徳が欠ける事なく円滑であることから、「月輪観」の定義は、密教の代表的な観法とされ、（花田　潔「文化財としての石神と石仏」『北薩民俗　第11号』北薩民俗学研究会）、澄み切った月をわが心と観じ、これによって種々の煩悩を清めるものである。

常盤五輪塔群（郡山町常盤）

常盤コミュニティーセンターの裏、竹林の中に百余基の石塔群がある。石塔の種類は五輪塔が主で、外に宝塔や層塔が数基あり、付近に埋没していたものを復元はしているが、完全ではない。

常盤五輪塔群（常盤）

そのうちの一番奥まった雑木の下には、大型五輪塔があり、鎌倉時代の川田氏一族のものと同型であると推定されている。また、数基の宝塔の相輪は、鮫島・市来・黒葛原各氏のものに類似していると言われている。

その他、墓地の入り口右側に萬霊無縁供養塔や明和二年（一七六五）の庚申供養塔などがある。これらの供養塔群は、この地方に住んでいた中世の諸豪族の歴史や近世の民間信仰を知るうえで、貴重な石塔群である。

第二節　石造物

この節では、中世から近代に至るまでの主な石造物を掲載した。現在の花尾町境に見られる平等王院等寺社領境界石（厚地村境界石）については、第一章花尾神社第三節に記載した。

1　仏教関連の石塔

南無阿弥陀仏の石塔（板碑）（東俣町三蔵塚）

三蔵塚の板碑は県道伊集院～蒲生線新設道路の近くで、東俣の渕脇秋彦氏の山にある。山頂には椎の木が群生し、何百年も昔の朽木が横たわり、その子孫になる木が石塔を囲むようにして立っている。石塔の側面に、文禄四年（一五九五）乙未とあり、今から四〇〇年も昔に建てられたものである。石塔の正面には南無阿弥陀仏と彫ってあり、その上部に阿弥陀三尊（阿弥陀如来・観世音菩薩・勢至菩薩）の梵字が刻まれた巨大板碑である。塔高約一八〇チセンで塔身部は二つの組石になっている。

阿弥陀仏の板碑（三蔵塚）

江戸時代この石碑の下の道（「郡山古道」…河頭から下平坂を上り、川田・東俣を経て厚地境の彼岸田・中尾・山神坂などを通る）を人々は往来し、この塚に旅の安全を祈って、やがて入来峠（たいまつ）を越え、宮之城などへ行ったのであろう。塚の下には出店もあり、松明や草履など売っていたらしい。また、塚の下の段々畑では六ケ村相撲が催され、戦前まで賑わっていた。

釈迦三尊碑（川田町川田中）

町道川田橋を渡って、稲松氏宅の入り口に、釈迦三尊の石塔と、大川銘の石碑が建っている。釈迦三尊の石碑には

文珠師利　　従智抖擻（じゅうちとそう）
釈迦文佛　　大房禅童　　従意頭陀（じゅういずだ）
普賢菩薩　　春徳修治（しゅんとくしゅうじ）

平頂頭角柱型石塔、高さ（全塔身一三五チセン、囲い石高さ五〇チセン）

（右側面）　劫石有消日郷談改無時

（左側面）　文禄三年（一五九四）甲午仲陽涅槃日　二月十五日

と彫ってある。石塔の建立された文禄三年は、室町時代の末期にあたる。

釈迦三尊碑（川田中）

光明真言の梵字碑（花尾町茄子田）

茄子田の小字蟻之元の山手に、茄子田家の氏神の近く、椎の木の大木群の根方に、この光明真言の梵字碑は建立されている。

高さ約一二〇チセンの立派な角柱塔婆で、真言陀羅尼の一字一字には神妙な意味があり、この呪文（二四語）を唱えると、一切の事物がことごとく成就すると言われ、これを念じて建立したものか、他所から移設も考えられる。

梵字碑

奄（オム）阿・謨・伽（ア・モ・ギャ）尾・慮・左・曩（ビ・ロ・シャ・ナ）麻・訶・母・捺羅・麻・尼（マ・カ・ムー・ダラ・マ・ニ）鉢・納麻（ハマン・ドマ）人縛・羅（ジンバ・ラ）鉢羅・韈・多・野・吽（パラ・バ・リタ・ヤ・ウン）　（梵字略）

岩戸集落に僧侶の墓という光明真言陀羅尼の無縫塔もある。

桑原泉壽院と井堰（郡山町常盤）

常盤井手上の滝壷を背にして、自然石を利用した記念碑が建っており、次のような碑文が刻字されている。

寛政十三年（一八〇一）辛酉二月吉日

石工　桑原泉壽院

奉佛長三百六十間諸取石橋並石檀

外郷士在中加勢二百人余

主取　白坂仲右衛門　上原休兵衛

前田弥八　松下次右衛門

桑原泉壽院が石工として井堰の工事に当たったことがわかる。

この桑原泉壽院の人物像を見てみると、その墓（五輪塔）は、現在八重の甲突池近くの桑原家の墓の横に建っており、墓碑銘は次のとおり。

権大僧都法印

泉壽院　大越家

入峯〇三度　桑原代　藤原自信

『三国名勝図会』に「八重山　郡山村にあり、此山中茄子背（なすはな）といへる岡阜に神鉾あり、霧島の神を勧請せしと云、其傍に小祠を建てゝ秋葉を奉祀す」とある。この霧島神の石祠に泉壽院自身の銘が彫られている。この辺り一帯が山伏の修行の場だったのではと想像される。当時薩摩藩では山伏を武士に列し神官として、武術練達にも心掛けさせ、それを利用していた。しかし、最も人気を呼んでいたのは疾病・悪魔退散の加持祈祷である。また、山伏たちは山村に居住し、霊山を回歴しながら、見聞して得た他国の進んだ農業知識を以て耕作を指導し、泉壽院のように新田開発・治水土木等にも尽力し、山守としての役目も果たしていたのである。

この泉壽院の墓には「権大僧都法印」とあるが、相当の高位といっていいだろう。

泉寿院石橋・石檀紀念碑（常盤）

石廟と宝篋印塔、庚申供養灯籠（郡山岳町里岳）

里岳集落の中央部にある里岳公民館と道路を隔てた福留フサ宅の庭隅に石廟と庚申供養灯籠が並んで建立されている。

向かって右側の石廟は、本体部分の高さは約五〇チセンで、物を格納する形で、三枚の板石で組み立てられ、上には入母屋造りの屋根蓋があり、中には小さいがよく整った立派な宝篋印塔が安置されている。

石廟の側壁と後壁の内外に、四八基の五輪塔卒塔婆が線刻され、卒塔婆には真言の種子（しゅうじ）や大日如来、文珠菩薩等の仏菩薩を表す梵字が墨書されている。また、安置されている宝篋印塔は、基礎・塔身・笠・相輪から構成されていて、その塔身には、次の文字が彫られていて、当時の僧の墓石塔と考えられる。

文正元年丙戌六月五日（一四六六）

妙　徹

石廟の左隣には、庚申供養灯

その石塔の島津家文様から、戦国時代のものと伝えられている。

石廟左側面の線刻

宝篋印塔の石廟（右）と庚申供養灯籠

籠がある。この石塔には、

正徳四年甲午二月吉日（一七一四）
奉燈立庚申供養塔　敬白

と、講人二四人の名前が認められる。火袋部分は欠損している。

庚申供養三重塔（有屋田町有屋田上）

有屋田バス停から山手に入るところ、慶長五年（一六〇〇）有屋田氏が高岡（宮崎県高岡町）に強制移動した後、その墓地跡に建てられた供養塔である。旧郡山町の庚申供養塔の中では、最も年代が古く、慶安三年（一六五〇）の建立。形態は三重塔で上部の相輪を欠くが、それでも高さ三メートル近い巨大な石塔である。一番下段の初軸には建立に関係したと思われる二二人の講人の名前が彫り込んである。また、二軸には五大種子（しゅうじ）の四方梵字が彫り込まれている。その一面には、「庚申供養慶安三庚寅天二月吉日」とある。第三軸には、四面に阿弥陀如来・観世音菩薩・釈迦如来・薬師如来の種子が彫ってある。作者「上山傭左衛門」の名前が初軸に見られる。

庚申供養三重塔（有屋田）

2　その他の石塔

桜島爆発記念碑（郡山町常盤）

常盤橋から北に約三〇メートル進んだ県道沿いに、大正五年（一九一六）一〇月一二日に建てられた記念碑がある。この石碑の裏に

大正三年一月十一日午前三時以来午後一時迄二十余回ノ強弱震アリ　就中（なかんずく）午前三時頃ト同十時・十一時四十分ノ三回及午後零時半前後ノ両三回最モ強ク震動永クシテ人心恟々（きょう）タリ　然ルニ未ダ誰シモ桜島ノ爆発ナルヲ豫知スルコト能（あた）ハサルモ或ハ桜島ノ爆発ニ非ズヤト危ムモノ尠（すくな）カラザリシガ　十二日午前八時御岳ノ西側ニ当リ雲ム状ノ白烟ノボリ同九時十分南岳ノ頂上ヨ

桜島爆発記念碑（常盤）

リ同様ノ白烟騰ルヲ見タリト　嗚呼是レ桜島大爆発前ノ事實ニシテ安永以来ノ大噴火ナリトス　十二日午前三時ヨリ十二日午前八時迄三百余回ノシン動アリテ同日午前九時ノ大シン動ト共ニ朝来噴烟シ居リタル横山即チ桜島西面四合目ノ人家ヲ撥ル約二十丁赤水ノ上方山腹ヨリ轟然大音響ト共ニ破裂シ　濛々タル噴烟凄シキ勢ヒニテ立登リ　火柱天ニ冲シ猛火ト共ニ飛冲セル岩石ハ空中ニ於テ火ヲ発シ　山ヲ傳フテ海中ニ墜落シ實ニ恐怖凄惨ヲ極ム　同日午前十一時烟頭ノ高サハ約三千米空ニ達シ同日午後六時三十分ノ大地震以後ハ爆セイ益々甚タシク　翌十三日午後一時前後ハ特ニ旺盛ヲ極メ　天柱挫クルカト思ハレタルガ同六時頃ヨリハ少シハ減退シ間断ナキ鳴響ヲ発シ噴烟實ニ一万六千尺ノ高キニ達シタルコトトテ　落下スル灰ハ四方ニ飛散シ最モ甚タシキハ国分加治木重富方面ニシテ　風位ノ為鹿児島市ノ降灰ハ著シカラズ　然レ共十七日ニ至リ鹿児島市ノ降灰ハ頗ル甚シク寸前暗黒トナリ昼間ト雖燈火ヲ用ヒタリ　此地震ハ九州全土ハ勿論高知県下幡多地方ニ迄遠雷ノ如キ音響アリテ遠キハ東京方面ニモ降灰アリタリト後数十日ニシテ止ム

附記

本村ニ於テモ十三日十四日ノ両日間ニハ鹿児島市桜島及伊敷吉野吉田方面ヨリ数千ノ避難民市ヲ成シ　各青年会員其他ニ於テ救護ノ方法ヲトレリ　又本村民ニシテ入来樋脇方面ヘ非難セシ者多数アリタレ共当村ニハ何ノ危険モナカリキ　仍テ之ヲ後世ニ傳ヘンガ為碑ヲ建設ス（ルビ筆者）

建設委員　代表世話人　上原喜平次　吉満助太郎　上原雄二
多丸善太郎　森山善熊

碑文の書者　多丸武雄　石工　藤崎利左衛門

外に四八名の建設寄付者の名が彫ってある。

招魂碑群（菅原神社　郡山町郡山麓）（智賀尾神社　郡山岳町里岳）

菅原神社の石段を上がり、右側の入り口を入ると、従軍兵士の霊を招き祭る招魂碑群がある。まず鳥居のすぐ右横、自然石に「義勇奉公」と大書し、日露戦役に従軍した人々の名を刻んだ明治三九年（一九〇六）三月三〇日建立の碑がある。

従軍者名簿　出征者　陸軍一七七名・海軍一一名、

戦死者　陸軍　三名・海軍　二名、戦病死　五名

勲章受章者　四〇名

招魂碑（菅原神社）

続いて、自然石に明治三七・八年戦役（日露戦争）の招魂碑があり、前記一二名の戦没者名が、陸軍中将正五位勲二等功四級大久保貞利書で彫られ、明治三九年四月五日に建立されている。三番目に

丁丑の役（西南戦争）三五名の招魂塚があり、一九歳の弱冠から、二、三〇代の若者の従軍に深い思いを致す。

日清戦役塚は、明治二九年（一八九六）六月二八日に建立されている。

日清戦役従軍者　陸軍　三一名、
海軍　五名、軍夫　二九名
戦没者　陸軍　一名、軍夫　四名

右隣には、昭和六一年（一九八六）四月吉日建立の慰霊碑があり、黒御影石に上海事変を始め、満州事変・日中戦争（かつて「支那事変」といった）・第二次世界大戦の戦没者名や陸海軍の軍属の方々の名が多数が刻まれている。

戦没者総数　四〇五名
内　昭和一六年七名、十七年一三名、一八年三四名、一九年一一五名、二〇年一六三名

智賀尾神社境内には明治三九年三月一〇日に建てられた日露戦役紀念碑があるが、それには嶽村から従軍した二一人の名が刻まれている。

日露戦役記念碑
（智賀尾神社）

川田橋（川田町川田中）

「鹿児島県地誌」によると、「入来往還に属す。甲突川の中流に架す。水の深さ四尺。橋の長さ十二間（約二一メートル）、幅九尺（約二・七メートル）石造」とある（　）内は注）。

現在の橋は、明治三四年（一九〇一）六月一三日、川田川に架橋されたもので、平成五年（一九九三）の八・六水害以前から架かる眼鏡橋としては、甲突川の本支流に唯一残されたものとなった。現在は市道である。近年欄干が元の形に復元されている。

アーチ橋　橋長さ　二二メートル、幅員　三・八メートル　面積　七七平方メートル

川田橋（川田）

水車

川田橋の側にある稲松斉家の敷地に、かつて肥料用の骨粉づくりのため、川田川の水を動力源にしていた水車が今も残されている。

明治二九年（一八九六）、川田在住の成尾甚之丞が水車営業の免

許を得たが、同三一年に稲松常三が権利を譲渡されると、翌年から三基で営業を始めた。獣骨粉を主に、鯨骨粉・鰹骨粉など生産していたが（「肥料水車免許願」明治二八年、「肥料製造販売届」明治三七年、稲松家所蔵）、化学肥料などが盛んになるにしたがって、太平洋戦争前に終業を迎えた。

稲松家の水車（川田）

郡山では、川田川だけでなく甲突川河畔にも精米や製粉用の水車があったが、現在はその跡も残されておらず、この稲松家の水車は郡山の隠れた近代遺産と言える。

敷地内には、今も石蔵や放水溝が残り、大切に保存されている。